

# 第V章 考 察

## 1 旧地形と平城宮造営前の遺跡

平城宮造営前の地形については、各発掘調査時における地山層の観察結果と宮城内主要地点のボーリング調査によって復原資料を蓄積してきたが、すでにこれらの資料をもとにして地形復原の研究もあり<sup>1)</sup>、おおよその輪郭が把握されている。ここではその後の資料も加え、宮造営前の旧地形を復原し、旧地形区分と遺跡の立地について検討する。

### A 平城宮造営前の地形と表層地質

平城宮は奈良盆地の北端、京都府との境界付近にひろがる奈良山丘陵が東南に延びる小支丘の南麓に位置し<sup>3)</sup>、下ッ道の北端を中心として東西、南北1 km 四方100 ha とその東の張り出し部20 ha を占めている。宮域内には三つの支丘が南に延び、支丘と支丘の間は浅い谷となり、その南は平野となっている。(Fig. 37)。

平城宮の造営に際して、旧地形を変えた大きな地業として水処理と整地がある。

#### i 水処理

**佐紀池** 宮の西北に位置する佐紀池の北方の谷筋には御前池・下吉田池・上吉田池が連なっているが、佐紀池底の第101次発掘調査によって、谷水を集めて南流する古墳時代の自然流路SD8520が確認された。SD8520は谷の開口部に位置し、流水を調整するための小規模な堰を伴っている。平城宮の造営に伴ないこの谷が閉塞されて園池SG8500に整えられた。SG8500は汀線に拳大の礫を敷きつめており、園池の規模と形は現在の佐紀池とさほど大きな差異はなかったようであるが、谷水の調整池をも兼ねたらしく、池尻には堰SX8192・8193(第92次調査)を設け、さらに宮西半部の基幹排水路である南北溝SD3825(第28次調査)へ導水している。

**水上池** 佐紀池と同じく宮の東北に位置する水上池も谷筋にあり、南の堤が東西方向に直線的に延びており、この位置が北面大垣にあたることから、水上池は宮の造営時に水処理の一環として、この谷を閉塞したことによってできたと考えられる。昭和3・7年に岸熊吉氏が一条通り北側で検出した玉石積の南北溝<sup>4)</sup>は北で池尻につらなり、南で内裏東側の玉石積の南北溝SD2700につらなる(第21次調査)。さらに宮の西南部を西北から東南に向けて流れていた旧秋篠川を東につけかえ、旧河道SX1579を埋めたてている。宮の廃絶後ふたたび、この旧河道に沿って氾

1) 八賀晋「平城宮造営以前の地形について」『大和文化研究』第13巻2号、1968、pp. 25-30。

2) 『平城宮報告Ⅶ』1976。『平城宮報告Ⅹ』1978。『年報1970』『年報1979』。

3) 立命館大学地理学同好会『生駒山脈』1944。

4) 岸熊吉「平城宮遺溝及遺物の調査報告」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第十二冊』1934。

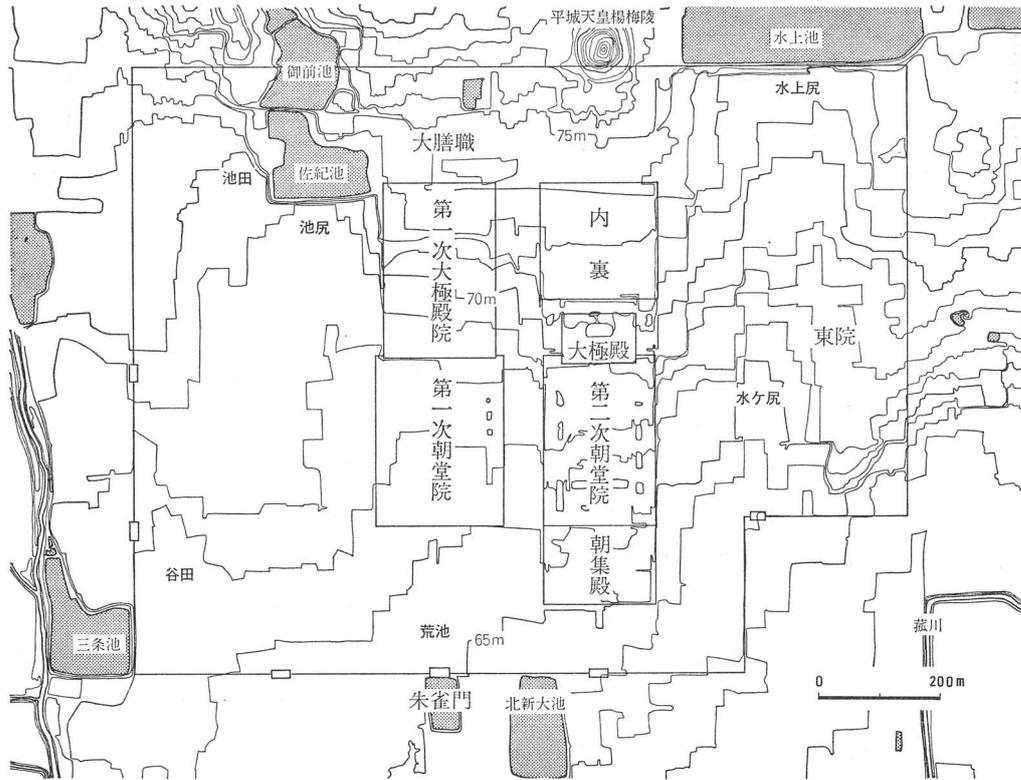


Fig. 37 平城宮の現地地形図

濫がおきており、現在幅20~25m、深さ 1.1m前後の南北につらなる窪みとなつてのこっている(第18・25次調査)。

ii 整地

a 内裏・第二次大極殿地区 宮東半を占める内裏地区は一辺 200m 四方の平坦面をなしている。この平坦面は支丘頂部および神明野古墳 SX0249 の墳丘を削平し、周濠を埋めたてて形成されたものである(第6・9・12・36・73・78・103次調査)。本地域の旧地表面は内裏東回廊 SC156 の西雨落溝と SX0249 の後円部第1段の円筒埴輪の残存状況からみて、遺構検出面よりやや高く、標高72 m 程と考えられる。また内裏北方で内膳職のある北方官衙地区も平坦面を呈しているが、ここでは丘陵頂部および市庭古墳 SX500 (平城天皇陵) の前方部を削平し、周濠を埋めたてている(第10・11・13・20・82・4・95-6次調査)。削平と整地にあって市庭古墳後円部第1段テラスの西側では地山を削りだしているが、墳丘裾をめぐる埴輪円筒列の据付痕跡(第95-11次調査)からみて、旧地表面はこの面より15~20 cm 高く、標高76 m 程と考えられる。内裏・大極殿地区から朝堂院に至る宮の南北の高低差を示すと Fig. 37 のようになる。内裏東外郭は中央支丘の東縁辺に位置しているため、地山の下る東南部に数度にわたり盛土している(26・70次調査)。この地区の地山は、内裏地区と内裏東外郭(第70次調査)では2.5m、第二次大極殿と内裏東外郭東南隅(第35次調査)では3.5m ほどの比高差があり、支丘が東縁で急勾配に下っている。また、内裏西外郭では地山が西南に下っている(第11次調査)。内裏北外郭においても東に地山が下っており、東端部では盛土の厚さが0.5m にも達している。

神明野古墳の削平

市庭古墳の前方部削平

東外郭の盛土

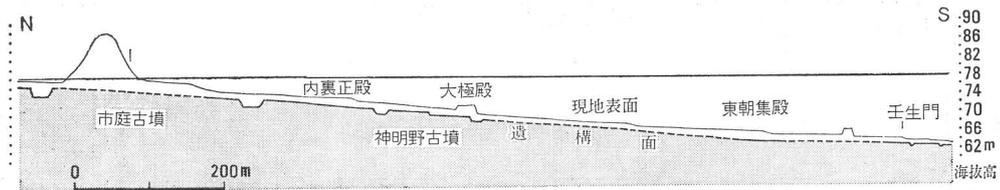


Fig. 38 第二次朝堂院・内裏地区の南北高低差模式図

第一次大極殿院の造成

宮北端部の削地

b 第一次大極殿院地区 内裏地区とおなじ台地上にある第一次大極殿院は南半と北半で大きな段差があり、それぞれ緩い傾斜面を呈しているが、北半部では支丘頂部が削平されており、床土の下がすぐ地山である。平城宮造営当初には大極殿前面の丘陵先端を斜めに掘削し、擁壁を造り出し、南限を設定していたが、のちにさらに南に拡張している。この段の残存高は1.5mほどあり、現地形の等高線71・72mはこの部分で北に突出している(第69・72・86次調査)。この擁壁より南75mで下ツ道東側溝の北端を検出している(第75次調査)。また下ツ道の北端より南の地山は粘質土で、北の地山は黄褐色の土である(第72次調査)ことから、擁壁から南75m位のところから丘陵は高まっていたものと考えられる。第一次大極殿院北半部と佐紀池の池尻(第92次調査)との地山面の比高差は3mほどあり、地山は西南に急勾配で下っている。また大膳職の中央(第5～8次調査)およびその北方(第62・79・84次調査)は丘陵頂部が削平されており、床土の下がすぐ地山である。東側の地山は東にわずかに下がり、自然路流SD337・338は東南方向に向いている(第8・11次調査)。大膳職西側の地山は佐紀池に向って急勾配で下っており、大膳職の中央と佐紀池の底との地山の比高差は6m位ある。この傾斜は一樣でなく、佐紀池東側より東約53mに0.9mほどの段があり、この段の下は有機質を含む灰色土で、池状の湿地を呈している。この傾斜池に3期にわたって広範かつ分厚い盛土がみとめられ、厚いところで1.5mにも達する。また大膳職の西北部も地山が佐紀池に向

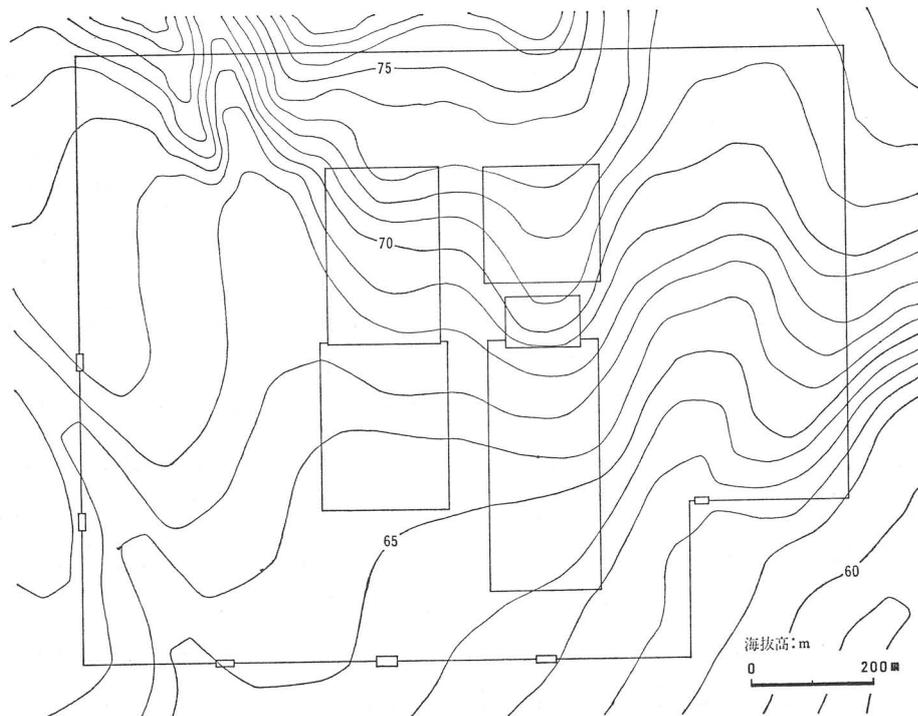


Fig. 39 平城宮造営前の旧地形復原図

1 旧地形と平城宮造営前の遺跡

って急勾配に下っており、この傾斜池にも盛土している（第107次調査）。佐紀池西岸の南側は床土の下がすぐ地山であり（第98—3次調査）、この位置まで支丘が半島状に突出していたと思われる。この地区の標高は72mで、第一次大極殿院の北半部の地山面とほぼ同じである。第一次大極殿院の南側は、中央支丘の西側の谷につらなる浅い谷で、旧地表面は谷筋に堆積した軟弱な腐植物を含む黒色粘土に覆われており、低湿地であったと考えられる（第41・77・97・102・111次調査）。この低湿地は第一次大極殿の擁壁より南130m付近より南に広がっている（第77次調査）。この低湿地の埋めたては数回におよんでおり、第一次大極殿院東南隅では盛土の厚さが1mにも達する。地山の標高は68.3mである（第41次調査）。さらに東朝集殿付近では40cmほど盛土によって整地されている。地山の標高は63.9mである（第48次調査）。

谷の埋立

c 東院地区 東院の西側は中央支丘の東側の谷につらなる浅い谷で、谷筋に低湿地があり、この低湿地を数回にわたって埋めたてており、盛土の厚さは30~40cmほどである（第22・43・104次調査）。また東院東南部分の低地も数回にわたって埋めたてられており、盛土の厚さは40~50cmほどである（第110・120次調査）。以上のように宮の造成に当って全体を平坦にするのではなく、旧地形を利用しながら削平・盛土により、平坦面を階段状に形成していた。中央支丘は削平の著しいところであったが、地山を削りだした古墳の墳丘第1段の埴輪据付痕跡からみて、旧地形は大幅に変えられておらず、盛土された個所が多かったため、宮造営以前の旧地形の輪郭を具体的に把握することができた。宮造営前の旧地形図は、1967年に奈良国立文化財研究所が作製した平城宮跡2000分の1の地形図を参考にして地山面の標高・傾斜等を調べ、さらに未発掘区については、そのまわりの宮造営前の地表面を考慮し、1m間隔の等高線で描いた（Fig. 39）。

東院地区  
低湿地の埋立

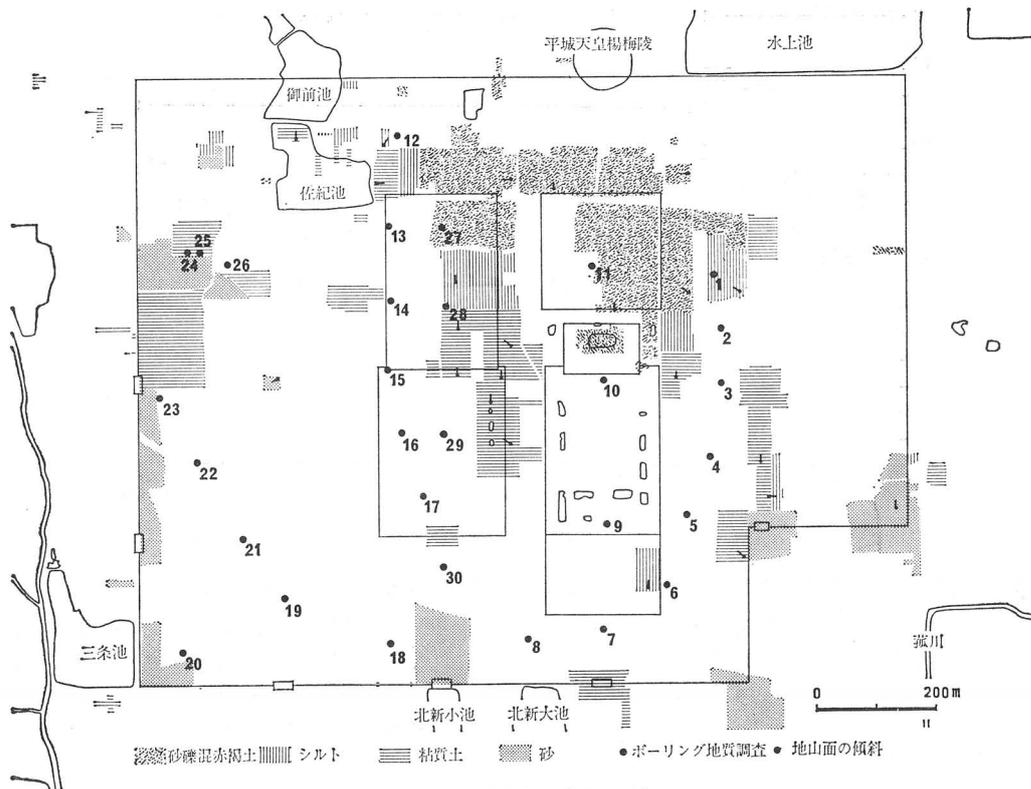


Fig. 40 平城宮の表層地質図

表層地質

d 表層地質 つぎに発掘調査で明らかになっている地山の表層地質をみると、北の支丘の頂部は赤褐色系の砂礫土であり、裾部は黄褐色系の土である。この支丘の南側および谷筋は灰色系の粘質土の堆積が優勢である。第一次大極殿院の立地する支丘の西・南は低湿地を呈し、腐植物を含む黒色粘土が広がっている（第41・77・91・97・102・111次調査）。ところが朝堂院南門付近は砂質粘土で黒色粘土が認められず（第119次調査）、低湿地はやや北側のところで終っている。また大膳職の西側（第2・81次調査）、東院の西側（第22・104次調査）と東側（第80次調査）にも低湿地が認められる。東院の西南隅東側の地山は高く、バラス混じりの暗褐色土で、西側の地山は低く黒色粘土であり、この付近まで東の支丘南端が延びていることを示している。この他に宮の西南部（第14・15・18・25次調査）、および東南部（第32・39・44・48・99・122次調査）には砂の堆積が優勢であり、第一次朝堂院南門および南面東門付近は粘質土が優勢である（Fig. 40）。

地質構造

e 地質構造 昭和46・47年度に平城宮跡環境整備の基礎調査として行なった宮域内の地質調査のデータ<sup>1)</sup>をもとに、宮域の地質構造について見てみたい。この地質調査はボーリングによる地表下5mまでの地・水質調査で、宮内30箇所で行なっている。この結果によると、支丘No.1～3・10・11・27地点では表土下に後期洪積層がみられ、砂礫・シルト・砂が互層をなしている。洪積層（段丘相当層）の粘性土のN値（検尺の標準貫入試験回/30cm）は10～20回、砂質土のN値<sup>2)</sup>は30～50回である。平野No.4～9・13～17・24～26・28～30地点および宮西南隅の旧秋篠川に沿ったNo.18～23地点では沖積層がみられる。沖積層は粘土・砂質粘土・粘土混り砂で構成され、全体的に不均質である。

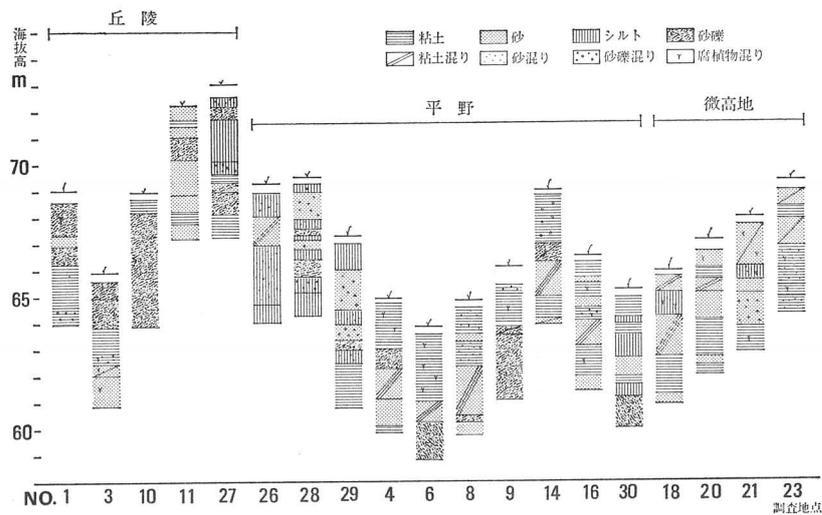


Fig. 41 平城宮の地質柱状図

- 1) 川崎地質株式会社大阪支店『平城宮跡環境整備昭和46年度第二期工事（ボーリング工事）報告書』1972, 『平城宮跡環境整備昭和47年度第二期工事（ボーリング工事）報告書』1973。
- 2) 大矢暁氏によるとN値一標準貫入試験は、内径35mm、外径51mm、長さ810mmのスプ

リットスプーンサンプラーをボーリング孔の孔底におろし、63.5kgのハンマーで75cmの落差から打撃し、サンプラーが地盤中に30cm貫入するに要する打撃回数を記録しN値とする。N値が低ければ土質はやわらかく、高ければ土質は緻密である。『地学事典』1971, p.916。

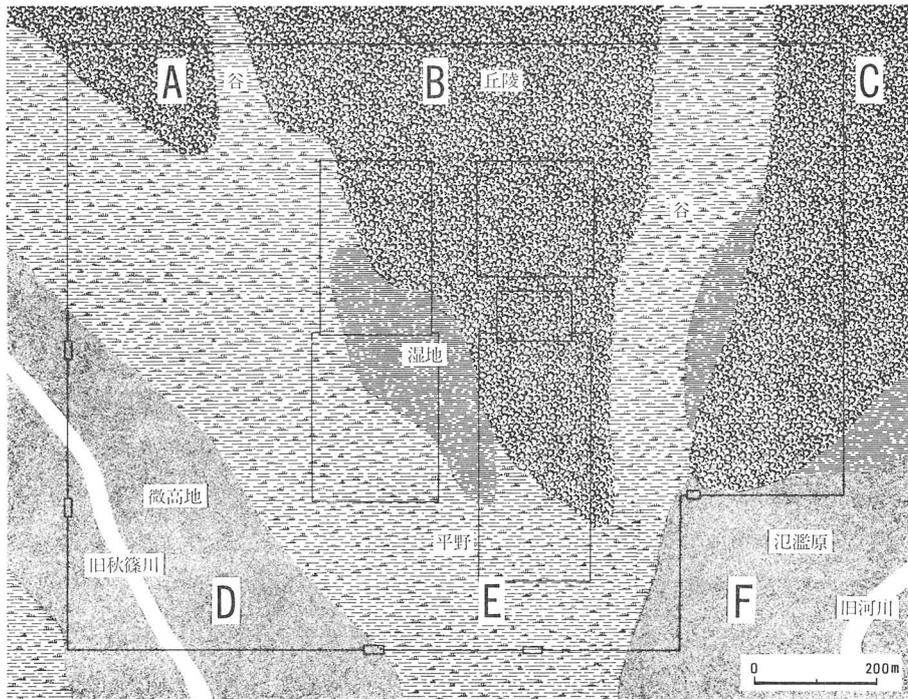


Fig. 42 平城宮の旧地形図

沖積層の粘性土のN値は3～10回である。No. 4～9・13～17・24・25地点の表層は粘土の堆積が優勢で、No. 26・28・29地点の表層はシルト・砂が互層をなしている。またNo. 18～23地点の表層は砂が優勢であり、この砂層中に腐植物を含み、地盤が軟弱であることから、自然堤防と考えられる。No. 9地点では表土下2mに厚く砂礫層が堆積しており、中央支丘は東南にゆるやかに傾斜していることを示している。宮域では全体を沖積土が被覆しており、沖積土は北ではきわめて薄く、南の厚いところでは3.5mもある (Fig. 41)。

つぎに地下水位と地形との関係について調べてみると、丘陵は自然水位が低く、揚水量がきわめて少ない。これに対して平野は自然水位が高く、揚水量が多い。また秋篠川沿いは自然水位がやや低く、揚水量が少ない傾向がみられる。

f 旧地形の概観 このようにして明らかになった宮造営前の旧地形の景観を概観すると、奈良山洪積丘陵の支脈が枝状に南に延び、支丘と支丘の間は浅い谷で、支丘南麓から南には沖積平野が広がっており、一部は湿地である。宮の西南には旧秋篠川に沿った微高地がみられ、また宮の西南隅には砂層が広がっている。現在の菟川の西側が谷状をなしているため、旧阿賀川がこの付近を流れ、その流域に氾濫原を形成したものと考えられる。宮の北と南の地山面の高低差は13m近くあり、全体として南に傾斜している。以上の点をまとめると Fig. 42 に示したように丘陵(A～C)、微高地(D)、平野(E)、氾濫原(F)の区分で示すことができよう。

旧地形  
の概観

## B 平城宮造営前の遺跡

平城宮跡の各発掘調査地からは、宮造営前の弥生時代、古墳時代に属する遺構を検出している(Fig. 43)。さらに遡るものとしては、遺構を伴わないが今回報告した縄文式土器が出土している。以下、地形区分にしたがって宮造営前の遺構をとり上げる。

**弥生時代の遺構**

弥生時代の遺構が検出された地点は奈良盆地の北を限る奈良山丘陵の南縁にあたる微高地と丘陵縁辺、それに平野である。旧秋篠川東岸の微高地Dでは弥生前期の土壌 SK6122, 弥生後期の土壌 SK3675 がある(第25・59次調査)。同じく旧秋篠川西岸の微高地においては弥生後期の竪穴住居跡9棟・方形周溝墓11基・土壌墓2基・溝2条があり(第14次調査)<sup>1)</sup>、これらの遺構はかなり重複していた(Fig.44)。竪穴住居跡には平面円形のもの2棟と方形のもの7棟があり、住居中央には炉跡がある。方形竪穴住居 SB1505は焼失し、そのまま廃棄されていた。

**竪穴住居跡**

**方形周溝墓**

**炭化米**

方形周溝墓は一辺が6m前後のものが多いが、なかには大型のものもあり、もっとも大きいSX1575は一辺が12.3mである。いずれも主体部は削平されていた。土壌墓SX1476には大型の壺棺を埋納している。西南方向の斜行溝SD1572・1577は、旧秋篠川に直交して人為的に掘られたもので、居住区と墓域を画す境界溝とみられる。土壌SK1431からは1斗におよぶ炭化米が出土した。弥生時代の遺構はさらに調査区外に広がっているものと考えられる。また二つの谷が合流する付近の平野には弥生時代後期の土壌が2基ある(第122次)。この他に弥生式

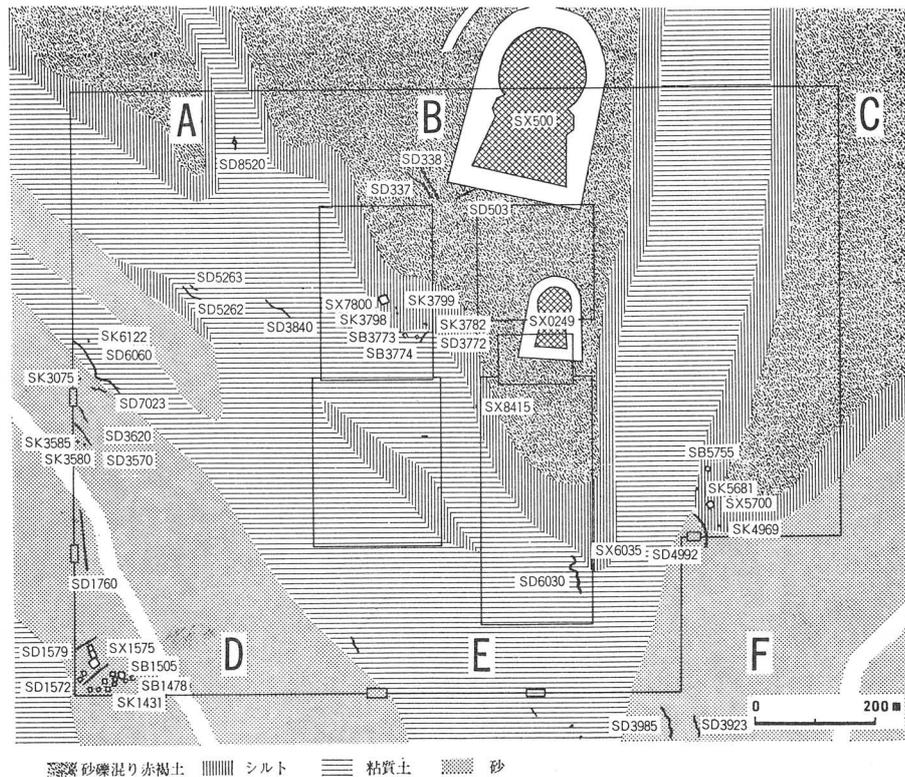


Fig. 43 平城宮の表層地質と造営前の遺跡立地

1) 『年報1965』 pp. 30-32。

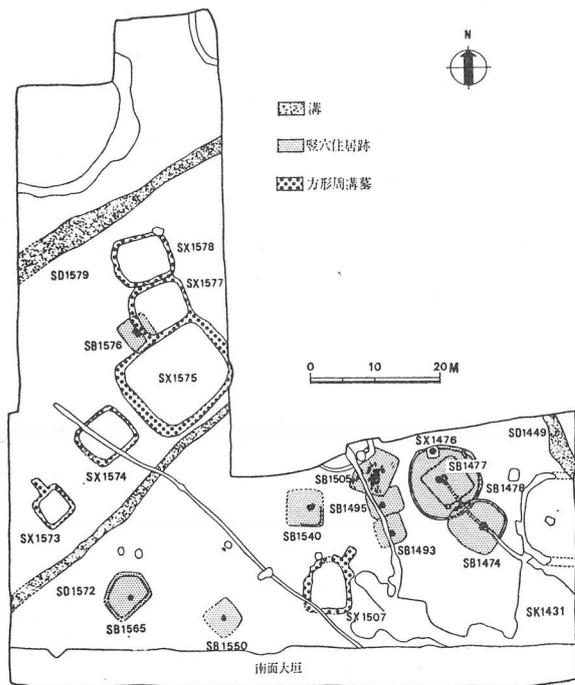


Fig. 44 第14次調査弥生時代の遺構

地だけである。しかし、東岸の自然流路からも弥生式土器が出土しており、この微高地にも弥生後期の集落跡があった可能性が高い。水田跡や木製農具は発見されていないが、集落の立地する微高地の後背低地で稲作が行なわれたことは、多量に出土した炭化米が如実に示している。

古墳時代の遺構が検出されるのは、各支丘頂部、支丘縁辺、微高地であるが、支丘B上には佐紀盾列古墳群のなかでは南端に位置する市庭古墳と神明野古墳が築造された。

市庭古墳 SX500 は南向きの前方後円墳であるが、宮の造営に際して前方部は削平され、周濠は埋められてきた。この古墳の前方部東南隅、外堤西南隅、南面外堤、東面外堤、後円西裾部をそれぞれ部分的に調査し、あわせて周濠の底を一部検出している（第10・11・13・20・95—11次調査<sup>2)</sup>）。復原全長 250m、後円部復原径 130m、前方部幅 160m、周囲に幅 40m 前後、深さ 1.5m の周濠をめぐらしている。墳丘は段築成であったらしく、墳丘第1段は地山を掘りこんで形成され、幅 2.5m の平坦面（テラス）に据えられた円筒埴輪が後円部西側で検出された。前方部東南隅近くの墳丘第1段の東斜面と南斜面は地山を急傾斜に削り出したのち、盛土によって 25° 前後の緩傾斜にしている。葺石は墳丘基底線にそって人頭大の石（径40～50 cm）を葺石として並べたのち、斜面上に小さめの石（径10～20 cm）を葺くが、前方部東南隅の東斜面およびその対岸の東外堤内斜面では、あらかじめ墳丘の稜線および斜面に 2～2.5m 間隔で人頭大の石を下から上へと1列に並べて区画線を設けて、各区画ごとに石を敷きつめている。

外堤内斜面は墳丘第1段斜面と同様の傾斜（25° 前後）をもち、外堤南辺西端から東 50 m

1) おもな古墳には神功皇后陵・成務天皇陵・日葉酢媛陵・マエ塚古墳・丸塚古墳・瓢箪山古墳・猫塚古墳・塩塚古墳・神明野古墳・磐之媛命陵・ゲンオ塚古墳・コナベ古墳・ウワナベ古墳・不退寺裏山古墳のほか多くの古墳が築造された。

2) 『平城宮報告Ⅶ』1976, pp. 53-54。なお、第126次調査では後円部西北部で、内濠、外堤、外濠が検出され、一部に外濠が存在していることが確認された。『年報1981』pp. 22-24。

1 旧地形と平城宮造営前の遺跡  
土器が出土した遺構として、東の氾濫原Fの南北溝 SD3923・3985（第32次調査）、同じくこの支丘Bの西縁辺に接する平地の東南溝 SD3840（第28次調査）、支丘A・B間の谷の南北溝 SD8520（第101次調査）がある。いずれも蛇行しており、自然の流路である。弥生式土器の出土点数は少なく、そのほとんどが弥生後期のものである。さらに遺構はともなわれないが、朱雀門付近（第16次調査）で弥生式土器片、支丘Bの東縁辺に接する平地（第22次北調査）で太形蛤刃石斧が1点出土している。現在のところ弥生時代の集落として確認されたのは旧秋篠川西岸の微高

自然流路

古墳時代の遺構

市庭古墳

の位置からはじまって西南に流れる溝 SD503 は古墳築成時の溝で、外堤が完成した段階ではこの溝を埋め戻し、その上に石を葺いている。溝底の高さは周濠底とほぼ等しく、周濠掘削とその後の墳丘築成時の湧水処理するための溝と考えられる。造り出しの有無は遺構上からは確認していないが、佐紀盾列の同規模古墳から推定すると造り出しをそなえていたとも考えられる。

**神明野古墳** 神明野古墳 SX0249 は市庭古墳の南に位置する前方後円墳で、宮の造営に際して墳丘は削平され、濠は埋めたてられている。この古墳の前方部西南隅、東側のくびれ部、後円西北部を部分的に調査し、あわせて周濠の底を一部検出している（第6・9・12・73・113次調査<sup>1)</sup>）。復原全長 105m、後円部復原径 64m、前方部幅 68m、周囲に幅 18m 前後、深さ 1.5m の周濠をめぐらしている。墳丘は段築成であったらしく、墳丘第1段は地山を掘りこんで形成され、後円部墳丘裾部と外堤部で埴輪列が確認された。後円部では墳丘の基底線にそって人頭大の石を一行に並べたのち斜面に拳大の石を葺いている。

**掘立柱建物** 神明野古墳前方部西南隅から西へ約 120m の支丘 B 西斜面で円筒埴輪を 2 個、南北約 3m の間隔で据えつけられた状態で検出した。この円筒埴輪列 (SX8415) の性格は発掘面積が狭いため不明である。このほか支丘 B に立地する古墳時代の遺構としては、西南縁辺部に、北で西にふれる掘立柱建物 SB3773 (4 間×3 間)、SB3774 (2 間×2 間)、一辺 11m で断面 V 字形の周溝を持つ方墳 SX7800、西南方向に蛇行する幅 0.95m、深さ 0.2m の溝 SD3772、土壙 SK3782・3798・3799 がある (第72・75次調査)。SX7800 の墳丘は削平され、基底部分のみを残している。周溝からは埴輪や布留式土器が出土した。また SD3772 からは布留式土器の破片が数点出土した。南縁辺部には今回報告した土壙墓 SX6035、東南方向に蛇行する溝 SD6030 がある (第48次調査)。

**掘立柱建物** 支丘 C の南縁辺の奈良時代の遺構の下層においては、北で東にふれる掘立柱建物 SB5755 (3 間×3 間)、断面 V 字形の周溝を持つ一辺 10m の方墳 SX5700、西北から南方向に「く」の字形に屈曲する幅 3~4m、深さ 0.6m の溝 SD4992、小土壙 SK4969・5681 がある (第39・43次調査) (Fig. 45)。SX5700 の墳丘は削平され、基底部分のみを残す。周溝上層から埴輪や須恵器が出土した。なお、SD4992 からは 5 世紀初頭の土師器や木製品が多数出土した。また支丘 C の東・西縁辺 (第39・43・105・120次調査) の整地土中にも埴輪が含まれており、支丘上に古墳があったものと考えられる。一方、支丘 A と支丘 B の間の谷には、南北方向に蛇行する幅 3m、深さ 0.6m の溝 SD8520 がある (第101次調査)。溝中から古墳時代前期の土師器、木製品が出土した。土器のほとんどが布留式である。

旧秋篠川東岸の微高地においては溝 SD3570・3620・

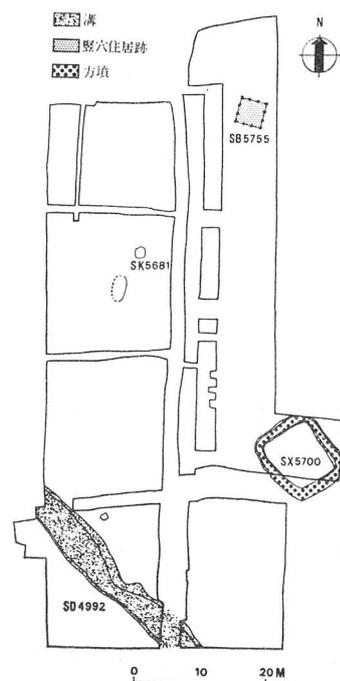


Fig. 45 第39・43次調査古墳時代の遺構

1) 『平城宮報告Ⅲ』1963, 『年報1979』p. 1。

1 旧地形と平城宮造営前の遺跡

6060・7023, 小土壙 SK 3580・3585がある(第25・50・51・59次調査)。溝はいずれも旧秋篠川に平行しており, 自然の流路と考えられる。また西岸は幅 1.1m, 深さ 0.7m の南北溝 SD 1760 があり(第15・18・25・50・51・59次調査), この溝は直線的で, 人工の溝と考えられる。さらに2つの谷が合流するやや平坦な平野 E においては北で西にふれる斜行溝があり, この溝の埋土より5世紀末の土師器・須恵器が多量に出土した(第122次調査)。

人工の溝

これら4, 5世紀の遺構の立地をみると, 大型古墳は支丘上に, 掘立柱建物や小型の墓は谷の入口に面する支丘縁辺と微高地, それに低地に散在している。特に支丘 B の西南縁辺および支丘 C の西南縁辺では掘立柱建物・小型の方墳・土壙・溝等が一つのまとまりをもって小規模に分散している。このような小規模のまとまりは掘立柱建物数棟からなることから, 一つの世帯ともみることができる。支丘 B の南縁辺では発掘面積が狭く溝 SD6030 や土壙墓 SX6035 しか検出していないが, 近くに掘立柱建物が存在しているのであろう。宮内では灌漑・排水施設や水田遺構は検出されていないが, 支丘と微高地との低地で稲作がおこなわれたことは豊富な木製農具がこれを物語っている。このような古墳時代前半の遺構のありかたは水田開発の一形態を示していると考えられる。以上の5世紀頃までの遺構に対して6, 7世紀の遺構はきわめて少ない。しかし, 左京三条二坊十・十五坪で東南方向に蛇行している溝 SD881からは5, 6世紀初頭, SD880からは5~7世紀前半の土器・木製品が出土しており, また右京六条一坊で北西から南東方向に蛇行している幅3~4m, 深さ1mの溝の底より4世紀後半から5世紀にかけて, 上層より5世紀頃から6世紀初めの土器が出土している。奈良盆地北部の沖積地への進出は5世紀以降に積極的に行なわれたことを示している。それも集落の面的な拡大ではなく点的な拡大によっていることは, 水田の開発と経営のありかたと関連して注目されることである。奈良山丘陵における大型古墳の築造は, これら低地における生産基盤に支えられていたものであろうと考えられる。

4, 5世紀の遺構の立地

6, 7世紀の遺構の立地

7世紀末から8世紀になると, 下ツ道が奈良山丘陵の裾部まで達していた。この西側溝 SD 1900-A 下層から8世紀初頭の多量の土器と木簡が出土した(第16・17次調査)。木簡の中に平城京造営にともなって消滅したと考えられる「大野里」の里名を記したものがあり, また墨書土器の中に「五十戸家」, 「五十家」などの里家の存在を示すものがあることより, 宮造営以前にはこの付近に集落が存在していたと推定される。また東側溝 SD7821 の東側で検出した掘立柱建物 SB7816 (2間×2間)・SB7817 (3間×2間)はこの時期のものと考えられている(第77次調査)。

下ツ道

1) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊』1975, p. 8・pp. 33-42, PL. 4・19-24。

p. 10・21, PL. 14・15。

2) 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974,

3) 『平城宮報告Ⅹ』1978, p. 60, PL. 35・45。

4) 『年報1973』p. 20。

## 2 土 器

### A 土器の出土分布と器種構成

S D6030は、奈良時代の遺構である東朝集殿の基壇下を、北西から南東に向けて蛇行しつつ流れている。溝のうち、基壇外となる北の部分と南の部分は全掘したが、基壇下では、部分的にトレンチを設けて流路を確認したにとどまる。土器の出土点数は、口縁部で個体識別した限りにおいて、溝下層 472 点、上層 456 点であった。北区と南区との出土量を比較すると、下層では北区 230 点、南区 242 点とほぼ同数であるのに対し、上層では北区 54 点、南区 402 点と著しく片寄っている。南区での出土分布を詳細にみると、とくに調査区南端 6 m の範囲に集中していることがわかる (Tab. 2・15, Fig. 46~48)。この集中状態は調査区の南の未掘部分に続いているものと推測される。

下  
層  
器  
種  
構  
成

下層から出土した器種には小型丸底壺、器台、椀、高杯、壺、甕などがある。土器の用途を供膳、貯蔵、煮炊の三つに大別すれば、小型丸底壺A、器台A・B、椀A、高杯は供膳に使用された土器とみなすことができる。小型丸底壺A、器台A・B、椀Aはいずれも胎土のキメが細かく、器表面に細いミガキ調整の施される精製品であり、高杯の大半を占める高杯Aも同様の精製品である。この他、壺 Ab (43)や壺 C (45)などにも器表面に緻密なミガキ調整が施されているが、ミガキの幅は広く、胎土はやや粗い。下層出土土器群の中であって供膳用土器に限り、そのほとんどが精製品であることは、きわだった特色の一つである。

壺、甕の分類について、本報告では明確な基準を設定することなく、慣用的に使用されてい

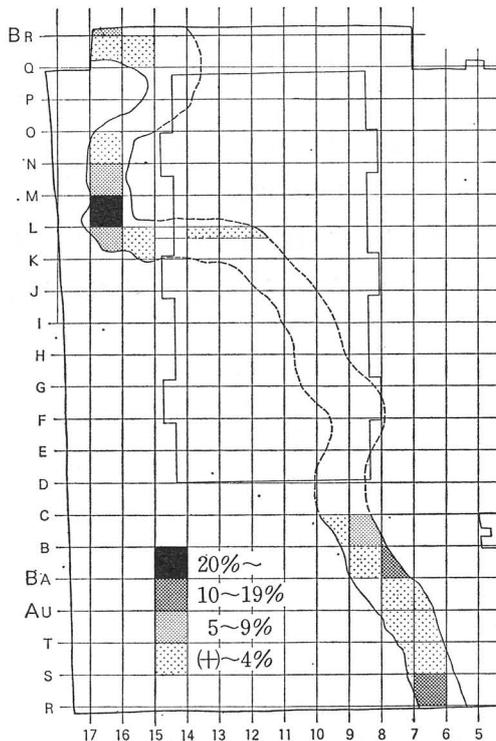


Fig. 46 SD6030 下層土器出土分布図

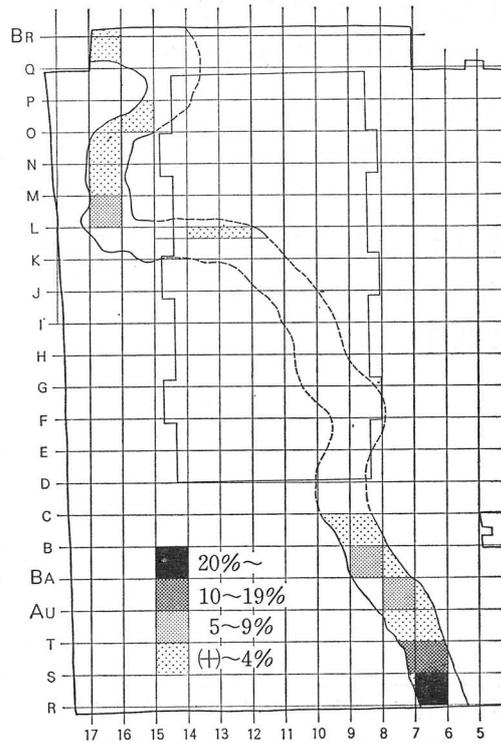


Fig. 47 SD6030 上層土器出土分布図

る区分をそのまま踏襲した。壺と甕は、弥生式土器にあっては、前者が貯蔵用、後者が煮炊用の土器として理解されており、器体の形態は比較的明瞭に分化している。SD6030出土の壺あるいは甕とした土器のうち、甕については器形からも、外器表面に付着したススの状態からも、ほとんど例外なく煮炊に使用されたと判断することができる。しかし、壺には若干の問題が残される。形態上、壺とした土器の中でも最も量の多い壺Aや壺Bには、外器表面にススの付着しているものが少なくない。それとともに、同様の法量、形態を示す土器であっても、器表面にススの付着するものとそうでないものがあり（壺Aaの41と42など）、壺形態をとる土器の一部は、恒常的に煮炊に使用されたのであるか否かは判断しかねるものの、形態から直ちに用途を推定することが困難な場合のあることを指摘しておかなければならない。また、壺と甕とを区別する形態上の指標の一つである口縁部の法量を基準にして両者を明確に分けることも困難である。一般的な傾向としては、口径：口縁

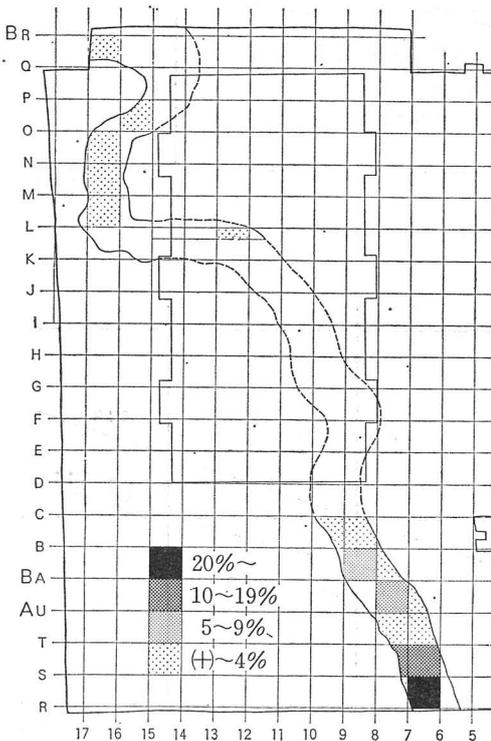


Fig. 48 SD6030 上層高杯B・C出土分布図

器 種 名	SD6030下層	SD6030上層	
小型丸底壺	Aa	87	0
	Ab	3	0
	Ac	1	0
	B	0 (19.3%)	1 (2.6%)
	C	0	11
器 台	A 10	29	0
	B 19	(6.1%)	0
椀	A	46	0
	B	0	1
	X	3	7
	把手付椀	1	0
		50	8
		(10.6%)	(1.8%)
大 鉢	0	4 (0.9%)	
甌	0	14 (3.1%)	
蓋	1 (0.2%)	0	
小型器台形土器	0	1 (0.2%)	
高 杯	A	12	0
	Ba	0	130
	Bb	0	51
	Bc	0	18
	Ca	0 (3.8%)	85 (63.8%)
	Cb	0	2
	X	6	5
			18
		291	
		(63.8%)	
壺	A	15	15
	B	15	2
	C	4	0
	D	8	0
	E	2	0
	F	15	0
	G	0	1
	H	0	2
	I	0	2
	X	2	5
		61	
		(12.9%)	
		0	
		27	
		(5.9%)	
甕	A	124	17
	Ba	14	36
	Bb	0	14
	C	34	9
	D	4	12
	E	3	0
	F	1	0
	G	11	5
	H	2	1
	Ia	23	0
	Ib	6	2
	X	0	1
		222	
		(47.0%)	
		0	
		97	
		(21.3%)	
須恵器甕	0	2 (0.4%)	
合 計	472 (100%)	456 (100%)	

Tab. 15 SD6030 出土土器個体数

第V章 考 察

部高の比率3:1~4:1を境にして壺と甕を区分することができる (Fig. 49・50)。しかし、それは幅をもった境界線であり、少なからぬ例外を生ずることになりかねず、適切な方法とはみなしがたい。従って、SD6030出土土器に限って言えば、壺と甕とを単純に形態の上から分類することはできず、各土器の用途を考える際には、体部と口縁部の大きさの関係や外器表面の器面状態などをもとに、個々の土器について個別に判断するほかはない。

壺と甕の  
比

もとより、体部を欠く製品も多く、個体数のデータも口縁部でのデータに限られているなど、不確定要素が少なくない。そのことを前提とした上で、下層出土の壺、甕の数量をみると、甕は222点(47.0%)あり、これに、壺としたもののうち煮炊に使用されたものを含めると、50%以上の土器が煮炊用であったと考えられる。それに対して、壺は61点あるが、その中で煮炊に用いられたもの、および供膳の器として使用されたと推定される壺Fなどの小型品を除くと、おそらく10%以下の比率になるものとみられる。以上をまとめると、下層出土土器群では、器台を除外すると、供膳に使用したものの約40%、貯蔵に使用したものの10%たらず、煮炊に使用したものの50%あまりという比率になるろう。

上層から  
出土した  
土器の  
種類  
構成

上層から出土した土器には小型丸底壺B・C・D、椀、高杯、深鉢、甗、壺、甕、須恵器の甗などがある。そのうち高杯が著しく多く、291点あり63.8%を占める。高杯の98%は同質の胎

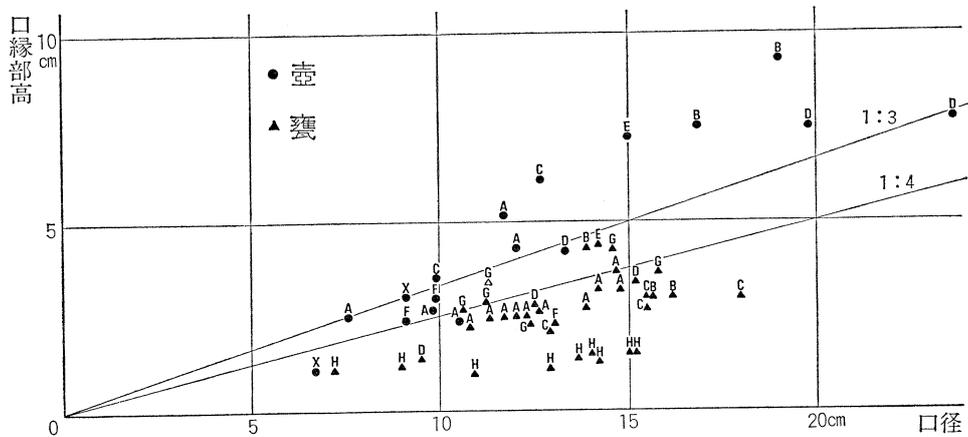


Fig. 49 SD6030 下層壺・甕類口縁部法量

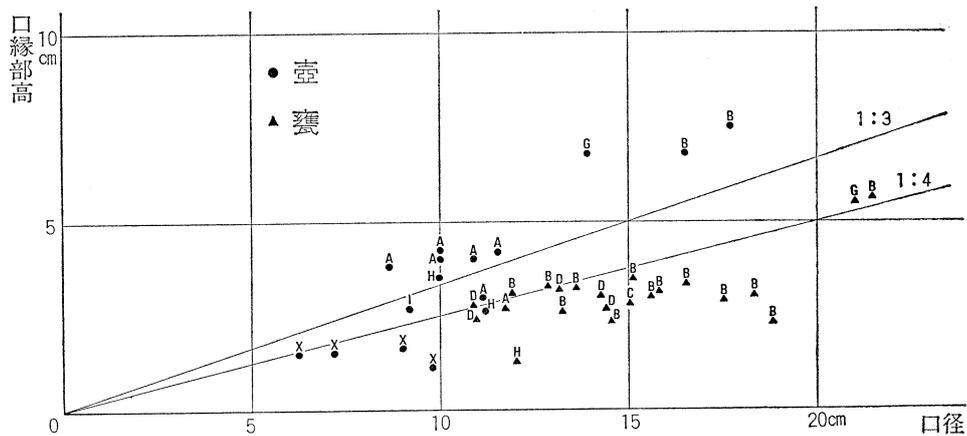


Fig. 50 SD6030 上層壺・甕類口縁部法量

土、同じ製作技法になる高杯B・Cで、その6~7割は南区南端付近に集中していた。壺と甕の区分については下層と同様の問題をはらんでいるが、壺の数量は甕を100とした場合26.8あり、下層ではそれが27.5の比率を示すので、ほぼ一致した傾向をみせていることになる。

須恵器は小型甕の口縁部の破片が2個体分出土したにとどまる。いずれも初期須恵器の範疇に属する製品である。

## B 下層土器群と上層土器群の比較分析

SD6030下層土器群は、精製の供膳用土器（小型丸底壺A、椀A、器台A・B、高杯A）と、薄手丸底の甕Aの存在を著しい特徴とする。小型丸底壺はその96%がAaであり、胎土、作り方に斉一性がみとめられる。また口縁部の外傾角度はいずれも55~65°の範囲内にあり、ほぼ60°前後に集中しているが、その反面、口

縁部と体部の法量の比率には個体差が小さくなく、口径に比して体部最大径の小さなものほど、口縁部の高さに対する体部の高さの比率が小さいという傾向を看取することができる<sup>1)</sup> (Fig. 51~53)。

下層出土の壺、甕の中には、明らかに大和地方以外の諸地域に由来すると判定しうる製品が少なからず存在する。壺E55は瀬戸内海東部沿岸地方の弥生時代終末期に普遍的にみられる、独特な形状を呈する複合口縁壺である。甕Gのうち57~59は、山陰地方に濃密に分布する、古

供膳用土器と甕A

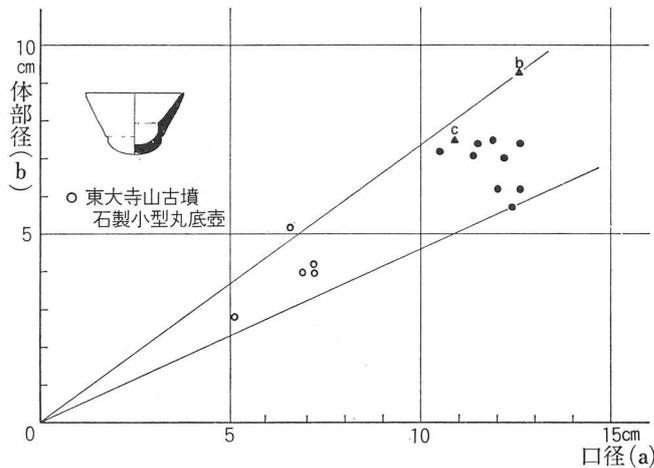


Fig. 51 SD6030 下層小型丸底壺 Aa 法量一1

他の地域土器

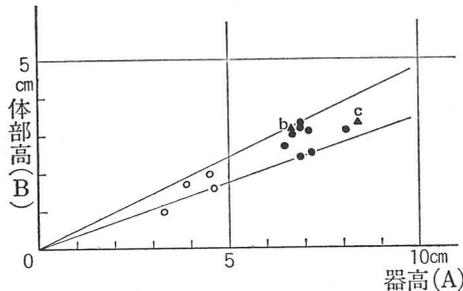


Fig. 52 SD6030 下層小型丸底壺法量一2

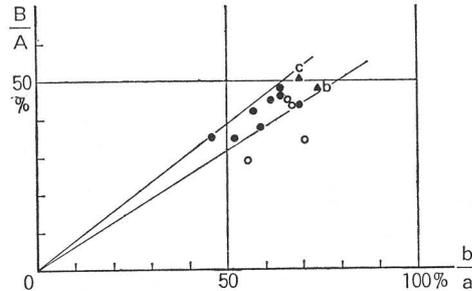


Fig. 53 SD6030 下層小型丸底壺法量一3

1) 奈良県天理市所在の東大寺山古墳の副葬品には13点の石製小型壺が含まれる。これらは形態、石質により数群に分別しうるが、そのうちの一群はSD6030出土の小型丸底壺Aaに

きわめて類似した形状を呈し、また個体差のあり方も同様の傾向を示している (Fig. 54)。文化庁監修『重要文化財28—考古I』毎日新聞社刊 1976, p. 127。

## 第V章 考 察

墳時代初頭前後に属する山陰系の複合口縁甕と判断される。甕F85は河内地方に生産地が想定されるいわゆる庄内式甕であり、甕H79・80は吉備地方で弥生時代後期に位置付けられる鬼川市Ⅱ～Ⅲ式<sup>1)</sup>に属する製品と考えられる。また、甕I86～92は、伊勢湾沿岸地方を中心に、関東地方から近畿地方にかけて広汎な分布圏を示すS字状口縁のつく台付甕である。この甕Iは29点あり、下層出土の甕の13.1%を占めている。下層の甕の主体をなす甕Aは、外器表面のほぼ全面にススが付着しているが、甕Iは台部および体部下端付近にススが付着することがほとんどなく、煮炊の方法が両者の間では異なるものであったことを明示している。以上に示したものに限っても、他地域の製品は合わせて39点あり、下層出土土器の8.3%、甕だけでみれば17.6%を占めていることになる。

**在地産の甕** 煮炊の容器としての甕では、同じ製作技術によると考えられる甕A・Bが下層出土甕の60.4%を占める。この甕A・Bは、いずれも丸底で、口縁端部を厚くつくり、外器表面にハケメ調整を施すもので、大和地方をはじめとして畿内地方各地で普遍的に、多量に出土する。前述した外来の製品に対して在地で生産された土器と考えることができる。

上層土器群は、高杯B・Cが多いこと、小型丸底壺はCがほとんどであること、甕では甕Bが最も多いこと、甗があり、わずかではあるが須恵器を伴うことなどが特徴としてあげられる。その他にも、とくに下層土器群と比較すると、いくつかの相異点のみとめられる。以下にその要点を列挙しよう。

### 下層と上層 の比較

① 下層にだけあり、上層から出土していないものには、二重口縁をもつ壺D、タタキ調整を施した甕E・Fなどがある。また下層に多い供膳用精製土器が上層には全くみられない。

② 下層にはなく、上層だけにまとまった数量をみせるものには、小型丸底壺C、高杯B・C、扁球形の体部をもつ壺Ac、大型の鉢などがあり、量は少ないが小型丸底壺B、外傾する口縁部の外面に低い稜のめぐる壺H、それに須恵器の小型甗がある。

③ 同じ製作技法によると考えられる甕Aと甕Bの数量比が、上層では8:1であるのに対し、下層では1:3と逆転する。

④ 上層では甕Cの比率が減少し、甕Dが増加する(甕C:下層甕の15.7%→上層9.0%、甕D:下層1.8%→上層13.0%)。

⑤ 下層では他地域からもたらされたと考えられる土器が少なくないのに対し、上層では明らかに大和以外の地域から搬入されたと判定しうる製品はきわめて少ない<sup>2)</sup>。

このように、各器種ごとの様相や器種構成のあり方からみると、一部に共通する要素がみとめられるものの、下層土器群と上層土器群との間には明瞭な違いがあり、両者は土器群としての総体的な存在形態を異にするものといえる。

### 他遺跡との 比較

平城宮東朝集殿下層溝S D6030の発掘調査と、その出土資料の一部の紹介<sup>3)</sup>がなされて以来、古式土師器に関しては、大和地方に限っても、いくつかの遺跡から出土したある程度まとまっ

1) 岡山県教育委員会『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16, 1977。

2) 甕H(169)は、吉備地方で弥生時代後期末葉に位置付けられている鬼川市Ⅲ式に属すると

考えられる。

3) 『年報1969』pp. 38-44。安達厚三「平城宮址遺跡出土の土器」『土師式土器集成』本編1, 1971。

た資料が公にされている。ここでは、それらとの時間的併行関係あるいは先後関係を示しておくことにしたい。S D6030下層土器群は、薄手・丸底の甕Aの盛行と、供膳用精製土器の存在<sup>1)</sup>を特徴とするもので、奈良盆地の南端に位置する高市郡明日香村坂田寺下層遺跡出土資料や、奈良盆地東南部の桜井市纏向遺跡辻土壇4上層出土資料<sup>2)</sup>にみられる各土器型式と共通した内容をみせており、時間的にほぼ並行する段階のものと考えられる。また、器種構成において基本的に共通するものの、各器種にわたり形態や製作技法に若干の変化のみられる橿原市藤原宮跡下層溝S D912・S D914、桜井市上ノ井手遺跡溝S D031<sup>3)</sup>および纏向遺跡辻土壇14出土資料<sup>4)</sup>などにやや先行する時期の所産であろう。

下層土器群

一方、S D6030上層土器群は、小型丸底壺C、壺Fがあり、厚手長胴の甕Bが盛行し、初期須恵器が共伴することなどから、上ノ井手遺跡井戸S E030上層土器群<sup>5)</sup>にほぼ並行し、奈良市平城京左京三条二坊遺跡下層溝S D881出土土器群<sup>6)</sup>にやや先行する様相を示している。なお、桜井市上ノ井手遺跡では井戸S E030上層土器群よりも時間的に先行する井戸S E030下層土器群があり、さらにこれは溝S D031土器群より新しい段階に位置づけられることが明らかにされている。従って、S D6030下層土器群と上層土器群は、時間的に連続するものではなく、一定の間隔をもったものと考えられることができる。

上層土器群

下層土器群は、当遺跡の所在する大和地方にあっては、大規模な前方後円墳が築造されるようになる時期に作られ、使用されたものであり、従来「布留式土器」と称されている土器様式の中でも古い様相を示すものである。上層土器群には須恵器が含まれ、新たに甗が加わるなど、土器様式の変化に大きな影響を与えらると思われる要因が顕在化している状況をうかがうことができる。

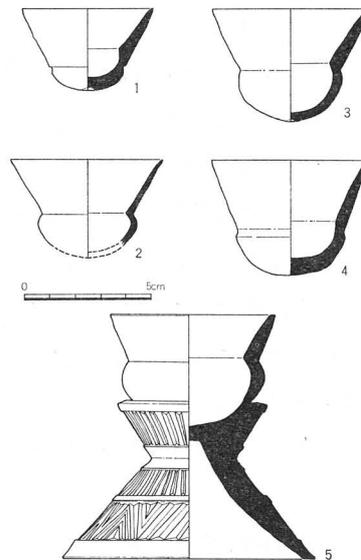


Fig. 54 東大寺山古墳出土の石製小型丸底壺(1:2)

1) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土器」『考古学雑誌』第60巻第2号, 1969。  
2) 桜井市教育委員会『纏向』1976, pp. 53-54・174・246。  
3) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報第37

冊, 1980。および安達・木下前掲書。  
4) 安達・木下前掲書。  
5) ただし須恵器は共伴していない。  
6) 奈良国立文化財研究所前掲書『平城京左京三条二坊』1975, pp. 33-36, PL. 19-21。

### 3 木製品

#### A SD6030 出土の木製品の検討

##### i 斧柄について

SD6030 から5点の斧柄が出土している。いずれも柔軟性にとむサカキの枝別れを利用した膝柄である。台部の形態から縦斧柄 (PL. 30—1・2・3) と、横斧柄 (PL. 30—4・5) とにわけるとはすでにのべた。ここでは、そうした斧柄に挿入する鉄斧頭の形状などについて若干の推測を試みてみよう。

まず、朝集殿縦斧柄 (1・2) に装着すべき袋のある鉄斧の大きさを推定してみよう。台部の先につくりだす装着部は、袋状鉄斧の袋部に挿入されるのであるから、それに対応する鉄斧をさがせばよい。朝集殿縦斧柄1は、装着部の長さが3.3 cm、幅2.2 cm、厚さ1.7 cm。2は長さ3.9 cm、幅2.8 cm、厚さ1.8 cmとなり、いずれも装着基部での計測値である。さて、古墳出土の袋状鉄斧では袋部の長径と短径とを数値で示す報告がなく、実測図にたよらざるをえない。また、サビのため原形をそこなっており、計測値がはたして原形のものか否かの問題もある。さらに、古墳に副葬する鉄器は送葬用の仮器であり、実用品でないとするかんがえかたもある。このようなことを承知のうえ、手近にある報告書のうち図面の揃っている奈良県メスリ山古墳<sup>1)</sup>の鉄斧と比較することにした。この古墳からは14本の鉄斧が出土しており、さいわいそのすべてが図示されているので、図によって袋部の長径と短径を測ってみる (Tab. 16)。朝集殿縦斧柄1・2に即応する鉄斧はないが、近いものはある。すなわちメスリ12・13が朝集殿縦斧柄1に近く、メスリ4・11・14などが朝集殿縦斧柄2に近い大きさをとる。うちメスリ4がもっとも大きく、そのほか

はおおむね長さ11cm内外、刃幅5 cm内外におさまる。ただし朝集殿縦斧柄1に対応するメスリ13はもっとも小さく、長さ9.7 cm、刃幅4.0 cmとなり、大型の斧柄に対して小型の斧柄であることを示し、斧柄の長短にも対応していることがわかる。今回報告した木器のうち、刃痕をとどめるものから刃幅をたどってみると、梯子 (44)、板材 (60)、杭 (76) などでは、縦斧、

番号	(長さ) (刃幅)		(備考)	(刃部形状)	(袋部径)	
	cm	cm			長径cm	短径cm
1	14.5	7.2	有肩式	直	3.6	2.0
2	13.8	7.3	〃	〃	3.3	1.3
3	13.4	6.7	〃	〃	3.4	1.5
4	12.9	5.5	〃	弧	2.7	1.7
5	12.8	5.8	〃	〃	2.8	2.8
6	11.6	5.7	〃	直	2.8	1.2
7	11.9	5.5	〃	やや弧	3.3	2.7
8	11.4	4.5	〃	直	2.6	1.6
9	11.4	5.1	〃	弧	2.9	1.7
10	11.0	4.3	〃	〃	2.8	1.8
11	10.9	4.5	無肩式	〃	2.8	1.7
12	9.8	4.2	〃	左弧	2.1	1.0
13	9.7	4.0	〃	弧	2.1	1.3
14	9.5	4.0	〃	〃	2.7	(2.0)

袋部径は実測図から求めた数値

Tab.16 メスリ山古墳出土の斧頭計測表 (報告書より)

1) 奈良県立橿原考古学研究所編『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊, 1977, pp. 132-135。

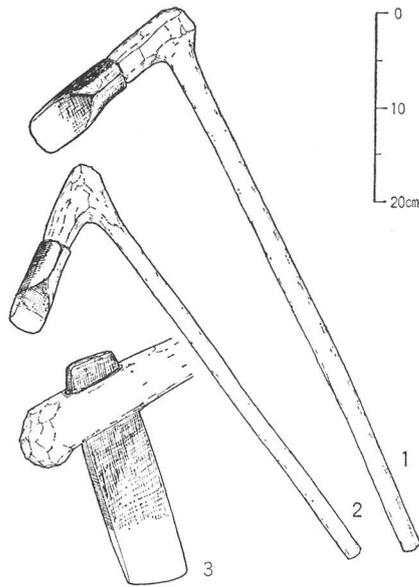


Fig. 55 縦斧模式図

横斧をとわず4 cm以上の刃幅が推測でき、これらの斧柄も建築・土木用のものであったことが類推できる。鉄斧用の縦斧柄の類例は乏しく、弥生時代後期の福岡県鶴町遺跡<sup>1)</sup>、古墳時代中期(5世紀)の和歌山県鳴神Ⅱ遺跡<sup>2)</sup>や平城宮6AAG地区<sup>3)</sup>のものが知られる程度である。それらはいずれも朝集殿縦斧柄1・2とほぼ同じ大きさであり、建築・土木関係の工具とみてよかろう。(Fig. 55-1・2)

つぎに朝集殿横斧柄4にはまる鉄斧をみてみよう。この斧柄では着装部の長さ4.5 cm、幅2.4 cm、厚さ1.8 cmを計る。やはりメスリ山古墳の鉄斧でみると、メスリ8程度の鉄斧を装着することが可能であり、その長さ11.4 cm、刃幅4.5 cmとなり、ほぼ縦斧と同じ大きさの鉄斧を想定

横斧柄

できる。横斧については、斧頭と柄をともづくりにする鉄製品が若干知られている。それらの刃幅には大小の別があるが、朝集殿横斧柄4で想定した鉄斧に近い刃幅をもつものとして、大阪府七観古墳<sup>4)</sup>や奈良県上殿古墳<sup>5)</sup>の鉄製横斧があげられる(Fig. 56-4)。一方、朝集殿横斧4の柄の全長は36.2 cmであり、縦斧柄の約半分の長さである(Fig. 56-3)。それは上殿古墳例ときわめてよく似た長さであり、古墳出土の鉄製横斧がたとえ実用に耐えない仮器であったとしても、実物を忠実に写しとっていることがわかる。中世の絵巻物にあらわれる片手持ちの横斧は、こうした横斧の具体的な使用法を連想さす。一方、弥生時代以来の扁平鉄斧の着装が想定される横斧がある。それは湖西線関係遺跡<sup>6)</sup>から発見されているもので、斧台の前面に鉄斧をおく切り欠きをいれ、その後方を一段低くして紐などで緊縛するように配慮したものである(Fig. 56-2)。

いままで、鉄斧の長さや刃幅しか問題にしなかったが、鉄斧の形態についても看過してはな

鉄斧の形態

らない。数少ない鑄造製品を別にすれば、一般には有肩、無肩に大別されているが、やはりメスリ山古墳の例でみると有肩のものは刃幅が全長の1/2.5以内におさまる狭刃のものと、全長に近いかそれを越える広刃のものにわかれる

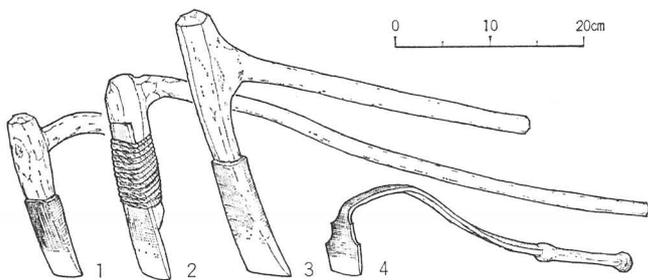


Fig. 56 横斧模式図

1) 福岡市教育委員会『鶴町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告第37集, 1976, p. 48。  
 2) 和歌山県教育委員会『昭和45年度阪和高速道路(近畿高速自動車道と和歌山線)遺跡発掘調査概報』1971, p. 12。  
 3) 町田章「平城宮跡出土の古墳時代木器」『大和文化研究』第12巻9号, 1967, p. 18。

4) 樋口隆康・岡崎敬・宮川従「和泉国七観古墳調査報告」『古代学研究』27号, 1961, p. 16。  
 5) 伊達宗泰「和爾上殿古墳」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第23冊, 奈良県教育委員会1966, p. 53。  
 6) 滋賀県教育委員会『湖西線関係遺跡調査報告書』1973, p. 186, PL. 77。

第V章 考 察

(Tab. 16)。こうした鉄斧の形態的分類が使用法とどのようにかかわっているのかが問題となる。鉄製横斧が有肩鉄斧の形をとり、後世の横斧にも有肩鉄斧がつけられていることから、従来は莫然と有肩鉄斧を横斧にあてていた。

片刃と両刃

古墳出土の鉄斧には、縦断面で袋部口縁短径の中心と刃先を結ぶとき断面形が左右対称の二等辺三角形あるいはそれに近い形をとるものと、袋部以下の刃部が一方に偏するものとに大別できよう(Fig.57)。いいか

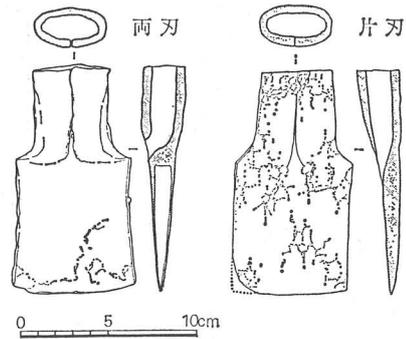


Fig. 57 両刃と片刃の鉄斧 (『メスリ山古墳』報告書より)

えれば、前者が両刃であり、後者が片刃であることを意味する。銹などに覆われた鉄斧の刃先から両刃であるか平刃であるかをすることは困難なことであるが、これによって片刃ないしはそれを意図する鉄斧が存在したことがうかがわれる。弥生時代の片刃石斧や後世の横斧の事例<sup>1)</sup>からして、この片刃鉄斧ともいべきものが、横斧に装着されていた可能性はきわめて高い。このようなことから、再び有肩鉄斧をみると、有肩鉄斧のなかに片刃と両刃の2種が混在していることがわかる。

斧柄の形態

朝集殿斧柄が縦、横をとわず、いずれも弾力性のあるサカキを利用しているので、削平なりハツリを主目的にしていることが推測される。では伐採や大木から角材などを切り出すときの縦斧としてはどのようなものを想定しえようか。現在のところそれらに対応する斧柄の事例を欠くが、鉄斧からするならば1 有肩広刃の大型袋状鉄斧, 2 無肩狭刃の大型袋状鉄斧, 3 短冊形鉄斧とよばれる扁平な板状鉄斧が候補にあがる。伐採用の縦斧の柄としては、縄文・弥生時代の石斧柄や後世のマサカリなどから推して膝柄はかながえられず、より頑丈なカシ割材などでつくる直柄を想定しなければならない。この場合、袋状鉄斧では斧台にあたる雇柄を袋にはめ、この柄孔に別木の柄をつける漢式斧柄が考えられよう。板状鉄斧では柄の先端に割目をいれ鉄斧をはさみ、紐で固定する直柄もかながえられようが、弥生時代以来の伝統を重視すれば、柄の先端に着装孔をあけてここに鉄斧を挿入する形式を考えるほうが無難である (Fig. 55-3)。

ii 膝柄股鋏について

鋤と鋏の別類

平面形をナスビを縦切りにしたような形につくり、身の中央に股をいれた耕具の使用法の問題は、多くの人達を悩ませてきた。というのは、おそらく柄をつける耕具であろうが、柄を身に対して平行につけるのか、それとも柄を直交させてつけるのかという点で意見がわかる。前者ならば鋤であり、後者ならば鋏としてかながえねばならないからである。大分県丹生川遺<sup>2)</sup>跡の出土例を報告した佐藤暁らは、これをA類馬鋏型木器とよび、斧の膝柄のような股木の柄を想定し、身の前面に固定する方法を推測した。その後、各地からの出土例があいつぎ、両説二様の着柄法が推測され、発掘報告書では鋤とも鋏ともよばれる状況がつついた。

1) 薬師寺西塔再建工事に際して部材の加工工程を西岡常一氏に教示してもらったところ、実用では両刃・片刃ともに使用されており、手斧がとくに片刃でなければならない必要性はなく、それよりも、むしろ刃先が蛤刃状の弧

形を呈していることが重要であるとのことである。

2) 富来隆・佐藤暁・杉崎重臣「丹生川—先史時代の水田遺跡の考察」『大分大学学芸学部研究紀要』2—1, 1962。

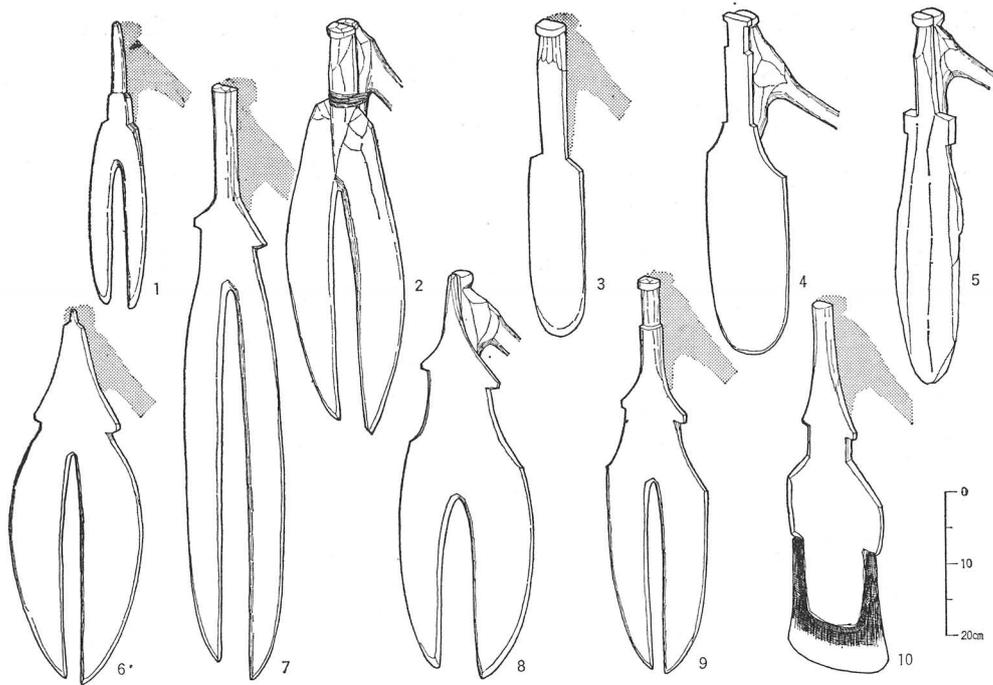


Fig. 58 膝柄鋤と膝柄股鋤模式図

1976年、黒崎直は各地で発見されているこの種の木器を集成し、「ナスビ形着柄鋤」とよぶことを提唱した<sup>1)</sup>。黒崎の想定によれば、名称が示すように身に対して平行する柄をとりつける鋤となり、これを前提にしてこの種の耕具が果たした歴史的役割りを追跡した。彼の見解では、「従来（弥生時代）広鋤が担っていた役割り、すなわち水田耕起作業に用いられる中心的な農耕具という役割りが、新しく出現したナスビ形着柄鋤によって肩代りされていく過程をうかがわせる<sup>2)</sup>」ものといひ、弥生時代的農法と古墳時代的農法とを画する重要な標識となるともいう。黒崎の意見に対するたいした反論もなく、筆者らも積極的に支持してきたのであった。

1977年になって静岡県宮塚遺跡<sup>3)</sup>から、黒崎のいうナスビ形着柄鋤に類似する耕具に一見斧柄にみまがうほどの膝柄を蔓で固定した股鋤が発見されるに至り、事態は一変する。すなわち、黒崎が「なぜこのような複雑な柄を作り、鋤として使用しなければならないか」としてしりぞけた佐藤案の正しいことが、実物によって証明されたのである。宮塚遺跡の着柄鋤は、黒崎のいうナスビ形着柄鋤と若干形をことにするが、後述のように両者が親縁関係にあることは疑問の余地がない。このようなことから、今回報告した朝集殿木器のなかにも存在するナスビ形着柄鋤として処理してきたものについて再考せざるをえなくなった。

宮塚遺跡の着柄鋤については、「二本歯の着柄形式の鋤で、鋤先は全長 54.5 cm、最大幅 19 cm、柄との接合部は長さ 12 cm、幅 3 cm の棒状に突出している。全長 42.5 cm の菱形に近い本体は、先端から長さ 31 cm 程の切り込みを入れて二本歯としたもので、厚さは基底で 2.5 cm、先端は 0.3 cm となる。接合する上面では、切り込みの周辺に深さ 0.5 cm 程の削り込

ナスビ形  
着柄鋤宮塚遺跡の  
着柄鋤

1) 黒崎直「古墳時代の農耕具—ナスビ形着柄鋤を中心にして」『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報 第28冊, 1976, pp. 3-36。

2) 黒崎前掲書 p. 32。

3) 建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・藤枝市教育委員会『宮塚遺跡・潮城跡』国道1号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告第4冊, 1981, p. 79。

第V章 考 察

みがなされ、下面では逆に稜をつくって削り残すが、これは素材のもつ弾力性を利用し、鋏としての機能性を高めるためと思われる。接合部は末端を段状に削り残し断面カムボコ状となる。柄は二股状の枝を素材とし、一方を長さ 16 cm に半截し、接合部に密着させたもので、一端は削り込まれて接合部と同様段状を呈す。着装方法は柄と鋏先をまずワラ状のもので密着させ、さらに幅 0.5 cm 程の蔓状の樹皮によって両者を縛り合わせており、一部に遺存する。鋏のほぼ全面にわたって鋭利な工具による成形痕がみられる。」と説明されている (Fig. 58-2)。これと従来ナスビ形とよんできたものとの相違は、前者の着柄軸が棒状を呈しかつ身の前面に浅い刳込みをいれるのに対して、後者では身の頭部を撥形につくり、着柄軸と頭部と刃部との境に入れた切欠きによって柄を着装した点にある。なお、宮塚遺跡例の時代については弥生時代から古墳時代にかけての間というような大雑把なことしかいえないようである。1977年から本格的な調査が行われた群馬県日高遺跡<sup>1)</sup>の水田から、弥生時代後期の膝柄鋏が発見されている。それは身部を擢形につくり、身部に二股ないしは一枚の刃をつけたものであるが、同時に発見された股木利用の膝柄をつけていた可能性がつよい。弥生時代後期において膝柄をつけた鋏が存在したことを示すと同時に、二股か否かを別にすれば、類似する宮塚遺跡例も弥生時代後期に属する可能性がつよい。

着柄鋏の代時

静岡県と群馬県の遺跡で発見された膝柄鋏に類似するものは、従来から知られる弥生時代の木器のなかに見出すことができる。たとえば大阪府池上遺跡の報告書のなかで、鋏BⅢ型式<sup>2)</sup>とよばれているものがそれである。「身と柄は組み合わせ式。長い着柄軸をつくり出し、柄孔および着柄溝は設けないもの。身は細長く反りを持たない。肩は下がり気味にわずかに張り出す。身および着柄軸の下面先端に凸帯をつくりだす。」と説明されており、中期(第Ⅱ～Ⅲ様式)の遺物であるという (Fig. 58-3)。日高遺跡例と同形で、従来フグンとよんできた木器のなかにもこの種の耕具がある。このようなことから、この種の木器を膝柄鋏とよぶことにしよう。膝柄鋏は古墳時代にも存続しており、今回報告した

朝集殿木器のなかにもある (Fig. 58-4・5)。

膝柄股鋏

岡山県上東遺跡<sup>3)</sup>、大阪府池上遺跡からは、扁平な身に二股をいれ、基部に棒状の着柄軸をつくりだす二股鋏とよばれる耕具が発見されている。いずれも弥生時代中・後期に属する (Fig. 58-1)。この種の耕具では着柄軸が上下二段にわかれ、上段つまり着柄軸の先端が一段細い棒状に突出している点が特色である。着柄軸が二段になるか、棒状を呈するかという点をのぞけば、宮塚遺跡例もこの種の鋏にぞくすることになる。これを膝柄股鋏とよぶことにしよう。

	長(a)	幅(b)	a/b
	cm	cm	
大分, 丹生川A	51.0	21.0	2.4
大分, 丹生川B	50.6	13.0	3.4
岡山, 下市瀬	46.4	10.0	4.7
大阪, 東奈良	73.0	15.5	4.7
奈良, 6ACA	82.6	13.9	5.9
奈良, 6AAX	55.9	20.0	2.8
大阪, 四つ池A	54.2	16.8	3.2
大阪, 四つ池B	47.7	13.9	3.4
大阪, 古池A	52.4	17.0	3.1
大阪, 古池B	48.0	14.0	3.4
岐阜, 宇田	47.0	17.0	2.8
静岡, 伊場	43.0	16.0	2.7
山形, 島	55.0	16.0	3.4

Tab.17 膝柄股鋏の長・幅の比較

1) 群馬県立歴史博物館『新発見の考古資料—発掘された古代の水田』1980, p.4, 写真6・7。  
2) 大阪府文化財センター『池上遺跡』第4分冊の1木器編, 1978, p. 12。

3) 岡山県教育委員会「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ, 1974, p. 125。

### 3 木製品

新に設定する二種の鍬にともなる木の幹と枝を利用した膝柄は、従来は斧柄に分類されてきた。いま宮塚遺跡例にしたがって上部後面が平滑で、台基部前面に溝をいれる膝柄をさがすと、<sup>1)</sup>静岡県登呂、<sup>2)</sup>奈良県纏向、<sup>3)</sup>大阪府池上遺跡など弥生時代後期・古墳時代の木器のなかに見出すことができる。

当面問題になっている「ナスビ形着柄鋤」も、鋤とするよりも上述の膝柄鍬、膝柄股鍬の部類に属する耕具とかんがえた方がよさそうである。そのことから、弥生時代中・後期からある笠形の頭部が発達していないものを膝柄鍬 A、膝柄股鍬 A とよび、いわゆる「ナスビ形着柄鋤」を膝柄鍬 B、膝柄股鍬 B とよびわけることにする。黒崎の研究によれば、膝柄股鍬 B は弥生時代後期にはじまり、古墳時代中期（5 世紀後半）まで使用される。膝柄鍬 B は古墳時代中期にあらわれ、ある期間膝柄股鍬 B と共存するが、次第に膝柄股鍬 B を凌駕していく<sup>4)</sup>という。この見解は大筋として正しいのだが、いま一度膝柄股鍬 B をくわしくみる必要がある。

弥生時代後期から古墳時代にわたって存在する膝柄股鍬 B は、鍬身基部と着柄軸の形によって 4 種に分けることができる。1 は撥形の頭部を左右から段をつけて削り込み、その端に着柄軸を細い突起状につくるもの。2 は上部が文字通り撥形を呈し、左右に段がなく棒状の長い着柄軸を削り出したもの。3 は着柄軸の上部が寸詰りとなり、先端部が細く短いもの。4 は着柄軸の後面に一段深く削りこみ、柄を緊縛しやすくし、木口に接する部分を節状に削りのこしているものである。

膝柄股鍬 B<sub>1</sub> は大分県丹生川・安国寺遺跡<sup>5)</sup>、大阪府東奈良遺跡<sup>6)</sup>にみられる弥生時代後期のものである (Fig. 58-6)。一般的な膝柄股鍬 B<sub>2</sub> は岡山県下市瀬遺跡<sup>7)</sup>、平城宮跡佐紀池などから発見されており、弥生時代後期から古墳時代初期に属する (Fig. 58-7)。膝柄股鍬 B<sub>3</sub> は近畿・瀬戸内地方の古墳時代中期の遺跡から発見され、三股鍬もふくめて出土例が多い (Fig. 58-8)。膝柄股鍬 B<sub>4</sub> も畿内地方を中心に広がり、山形県島遺跡<sup>8)</sup>にまでおよんでおり、古墳時代後期に属する (Fig. 58-9)。膝柄股鍬 B は普通長さ 50~60 cm の大きさであるが、膝柄股鍬 B<sub>2</sub> には全長が 70 cm をこえる大型のものがある。また、4 種類を通じて狭刃と広刃の区別があるらしく、その境は身幅に対する全長の割合が 1 : 4 付近のようである (Tab. 17)。

さて、膝柄股鍬 B のうち、弥生時代後期にはじまる膝柄股鍬 B<sub>1</sub> がもっとも古い。この鍬にともなる長大な二股の刃は、同時期の北部九州の遺跡から発見される股鍬とよく似ている (Fig. 59)。一方、基部に

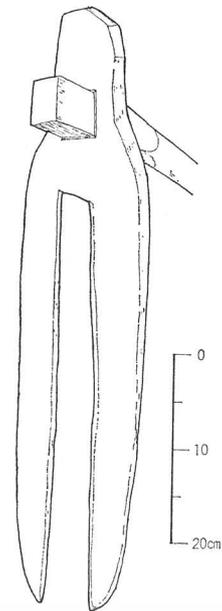


Fig. 59 北部九州の股鍬模式図 (板付第2区遺跡)

膝柄股鍬の A と B

膝柄股鍬 B の時代

北部九州の股鍬

1) 日本考古学協会『登呂』本編, 1954, 挿図第 36・62-64。  
2) 石野博信・関川功『纏向』榎原考古学研究所 1976, p. 322, 図154-16。  
3) 大阪文化財センター『池上遺跡』第4分冊の2木器編, 1978, PL. 22-8。  
4) 黒崎前掲書, pp. 18-19。  
5) 九州文化総合研究所編『安国寺弥生式遺跡の

調査』毎日新聞社 1958, p.239。ここではヒレ状木器とよんでいる。  
6) 東奈良遺跡調査会『東奈良』1979, p. 239。  
7) 岡山県文化財保護協会「落合地区下市瀬遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(3), 1973。  
8) 山形市史編さん委員会「島遺跡」『山形市史』別巻1, 1964, 第41図-11・12。

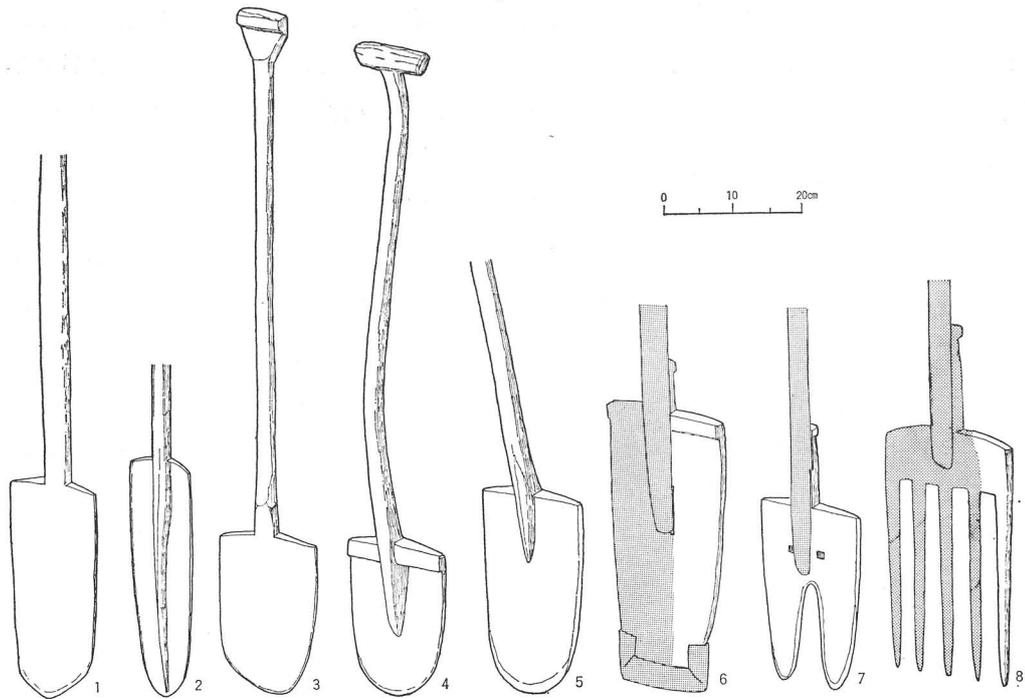


Fig. 60 鋤・フォーク状木器模式図

膝柄股鋤の  
原 型

みられる二段の着柄軸は、畿内・瀬戸内地方の膝柄股鋤Aと共通している。また、膝柄股鋤Aは古墳時代の遺跡からの発見例を欠いているので、古墳時代には消滅する耕具らしい。以上のようなことから、北部九州の股鋤と畿内・瀬戸内の膝柄股鋤Aとが合体した形態が膝柄股鋤B<sub>1</sub>ではあるまいか。北部九州でさかんに使用されている股鋤は、板状の身に二股、ときには三股をつくり、長い刃部は鋭い刀身形を呈し、柄は基部にあけた長方形の柄孔に挿入する。その機能は、類似の形をとる膝柄股鋤Aにくらべてすぐれていることはたしかである。膝柄股鋤Aにはサカキなど弾力性のある膝柄がもともと装着されていたこと、畿内地方では方形なり長方形の柄孔をあける方法が発達していなかったことなどによって、北部九州の股鋤を導入するとき膝柄股鋤B<sub>1</sub>のような形態を生じたのではないかとおもわれる。

膝 柄 鋤

鉄刃の装着

膝柄鋤Bは、古墳時代後期になってあらわれる。基部の形状は膝柄股鋤B<sub>4</sub>に対応するが、一枚刃に鉄刃先を装着する点をもっとも異なる。鉄刃先をつけるため身の先端を舌状につくり、ときには静岡県伊場遺跡例のように鉄刃先をつけた状態で発見されることもある<sup>1)</sup>(Fig. 58-10)。

膝柄鋤Bの発生は鉄刃先をはめることにある。いまのところ、膝柄鋤Aの発展形態なのか、膝柄股鋤B<sub>4</sub>の発展形態なのか明らかにしがたいが、形態的にみれば膝柄鋤Aとの関係がつかいようにおもえる。膝柄鋤Bの出現によって膝柄鋤A、膝柄股鋤Bも消滅に向うことは事実である。だから、両者の機能をともにそなえた耕具であることはたしかである。本文完成後、滋賀県針江中遺跡から5世紀末ごろの膝柄鋤Bと、これにともなう柄が出土した<sup>2)</sup>。着装状況からすれば、明らかに組合せ式の鋤であり、鋤ではない。このことによって黒崎の説も完全に否定できず、鋤と鋤との両用に使う耕具と考えられるに至った。

1) 浜松市遺跡調査会『伊場遺跡 第6・7次発掘調査概報』1975。

2) 滋賀県教育委員会『国道161号線バイパス関

連遺跡調査概要(昭和57年度)3—新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・針江北遺跡発掘調査概要』1983, p. 29。

## iii 古墳時代前・中期における耕具の構成

各地で木製耕具の出土例が増加するにしたがって、弥生時代の九州地方の耕具と畿内地方の耕具との間に著しい相違があることが注目されている。一方、畿内においては、弥生時代前・中期の耕具とそれ以降の耕具との間に顕著な差異があり、古墳時代前・中期の耕具と弥生時代後期との間に強い関連性があることが次第にあきらかになりつつある。そうした観点から奈良盆地の遺物を中心に古墳時代前・中期における耕具の構成をうかがってみることにしよう。

弥生時代前  
中期と後期  
の差異

## a 鋤類 (Fig. 60)

鋤類は大きく一木鋤と組合せ鋤とに分かれる。一木鋤は弥生時代以来の形態をとり、バラエティにとむ。身の長さによって大小に区別できる。大型のものを、ここでは一木鋤Aとよぶ。一木鋤Aは身の長さが30 cm内外のもので、1:後面を平坦にして前面を舟底形につくるもの、2:身幅を縮め前面中央に鑄をとおすものにわかれる。一木鋤A<sub>1</sub>は池上遺跡からも発見されており<sup>1)</sup>、弥生時代後期に属する (Fig. 60-1)。一木鋤A<sub>2</sub>は平城宮6AAG地区から出土した古墳時代中期の例が知られている<sup>2)</sup> (Fig. 60-2)。

一木鋤

小型のものを一木鋤Bとよぶが、その身の全長は20 cm内外で、完形品によれば全長は1 m内外となる。出土量が多く、形態も各種のものがみられ、ここでは3種類に分類しておく。1:柄を直線的に削り出すもの (Fig. 60-3)、2:身に近いところと握り部に近いところで、カーブの弱いS字形に屈曲するもの (Fig. 60-4)、3:柄が斜め上方にのびるもの (Fig. 60-5)、である。一木鋤B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>はともに弥生時代後期からの形態だが、一木鋤B<sub>2</sub>は古墳時代中期になって著しく発達し、朝集殿鋤6のように身の前面中央に鑄をとおし、肩部を厚くするのは一つの典形といえよう。一木鋤B<sub>3</sub>も古墳時代中期の例で、平城京6AFI地区の例では、身に対して約20°の角度で柄が斜め上方にのび、長さ1 m内外の鋤をえようとすれば、厚さ30 cm内外の板から削りだしたことになる<sup>3)</sup>。握り部の形状はさまざま、削り出しのT字形、柄差ししたT字形、中空半円形な中実三角形などがみられる。しかし、多くの場合は身と柄が折損した状態で発見されるので、特別の傾向を見出すことは困難である。

身とは別木の柄をつける組合せ鋤の発見例は少なく、いまのところ分類をさしひかえることにする。平城京朱雀大路側溝からは、断片ではあるが大型の鋤身が発見されている。身の上寄り中央に柄を挿入した柄穴と、先縁に鉄刃先をはめた痕跡をとどめている<sup>4)</sup> (Fig. 59-6)。古墳時代中期の遺物である。しかし、その形は上東遺跡のもの<sup>5)</sup>と一致しており、弥生時代後期以来の形であることがわかる。朝集殿鋤8は、小振りの二股鋤で、棒状の柄受けと身の中心に柄を緊縛する一対の孔をあけている (Fig. 60-7)。いまのところ類例がない。

組合せ鋤

## b フォーク状木器 (Fig. 60)

鋤のように柄を身に対して平行につける農具に、フォーク状木器がある。それは身を数本の細長い歯に分つ道具である。朝集殿下層、平城京6AFI地区で発見されているのは歯の断片で、

フォーク状  
木器

1) 勲大阪文化財センター前掲書『池上遺跡』第4分冊の2 PL. 45-1~4。

2) 町田前掲書「平城宮跡出土の古墳時代木器」p. 18。

3) 奈文研前掲書『平城京左京三条二坊』p. 37。

4) 奈良市前掲書『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974, p. 17。

5) 岡山県教育委員会前掲書『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第2集。

全形を知りうるものはない<sup>1)</sup>(Fig. 60-8)。また有柄になるのか着柄になるのかも不明である。静岡県山木遺跡例のような弥生時代後期の諸例からすれば、着柄の具であるかもしれない。

c 鋤 類 (Fig. 61)

**各種の鋤** 鋤類については、必ずしも適切な分類といえないが、広鋤・狭鋤・膝柄鋤・膝柄股鋤に分類する。前の二者はカシ割材の丸棒を柄とし、後の二者はサカキのような弾力性のある膝柄をつける。

**広 鋤** 広 鋤 広鋤は2種にわかれる。広鋤Aは身の平面形が幅広の長方形を呈するもの (Fig. 61-1)。朝集殿鋤16は左右や上縁に弧形の切り込みをいれた多分に装飾性を加味した広鋤Aの例である。弥生時代後期の長方形板の中央に柄壺をあけた広鋤と、ほぼ用途を一にしているとみてよい。広鋤Bは柄壺の左右で身幅を縮め、刃部の幅にくらべて上部の幅を狭くするものである (Fig. 61-2)。いまのところ奈良県では発見例を欠くが、滋賀県湖西線関係遺跡から発見されている<sup>2)</sup>。身の後面に柄壺の舟形突起をつくり、前面の上部に蟻納仕口で棧をはめこむ。直刃で鉄刃先をつけた痕跡はない。同形のものが弥生時代後期の奈良県四分遺跡<sup>3)</sup>、纏向遺跡石塚古墳周濠<sup>4)</sup>で発見されており、弥生時代後期以来の耕具であることがわかる。このほか、湖西線関係遺跡からは、刃部が円弧形を呈する広鋤が発見されているが、類例を欠くのでここではふれないでおく。

**狭 鋤** 狭 鋤 狭鋤の出土例は乏しく、いまのところ朝集殿鋤17の例にとどまる。それは刃先をやや広い長台形にかたどり、長方形の柄壺をあけている (Fig. 61-3)。上述のように、畿内地方では舟形突起をつくらず長方形の柄壺をあける鋤の例がなく、九州との関連を示すものとして注目される。

**膝 柄 鋤** 膝柄鋤 この種の鋤の概略はすでに述べた。擢形を呈する弥生時代以来の膝柄鋤Aが、古墳時代前・中期を通じて残存し、膝柄鋤Bの出現したのちに消滅する (Fig. 61-5)。

**膝 柄 股 鋤** 膝柄股鋤 弥生時代後期に出現した膝柄股鋤Bは、B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、B<sub>3</sub>、B<sub>4</sub>と形を変えながら、古墳時代の主要な耕具となり、膝柄鋤Bの出現以降次第に衰退していく (Fig. 61-4)。

この股鋤の特徴は、長大な二股の刃部にある。身が長く柄が短い鋤は、民俗例によれば、土質の軟かい畑作業に用いられており、使用時には地面にうつむいて削るようにして後退しながら耕す。一方、身が長く二股になる鋤は土がよくきれ、粘質の土壌で有効に働き、柄の角度が鋭角のほうが使いよいとされている。膝柄股鋤Bもおそらくそうした類の耕具であり、低湿地での出土例が圧倒的多数を占めることから、水田用の耕具とみなすべきである。

エ プ リ d エブリ (Fig. 61)

身に対して直交する柄をつける耕具にエブリがある。幅広の長方形あるいは台形の板で身部をつくり、その長辺を刃部にあてる。朝集殿エブリ20のような直刃のものほか (Fig. 61-6)、鋸歯形の歯を切り出す例もある (Fig. 61-7)。また大阪府服部古池遺跡例のように、前面の柄壺の周囲に突起をのこし、左右上部に支木をはめる切り欠きをいれ、柄を強固にするものもある<sup>5)</sup>。

1) 奈文研前掲書『平城京左京三条二坊』, Fig. 27-29。

2) 滋賀県前掲書『湖西線関係遺跡調査報告』, p. 124, PL. 64-1。

3) 奈文研前掲書『飛鳥・藤原宮発掘調査報告

Ⅲ』 p. 136, PL 74。

4) 石野博信・関川功前掲書『纏向』, p. 318。

5) 豊中・古池遺跡調査会『豊中・古池遺跡発掘調査概報そのⅢ』1976, p. 46。

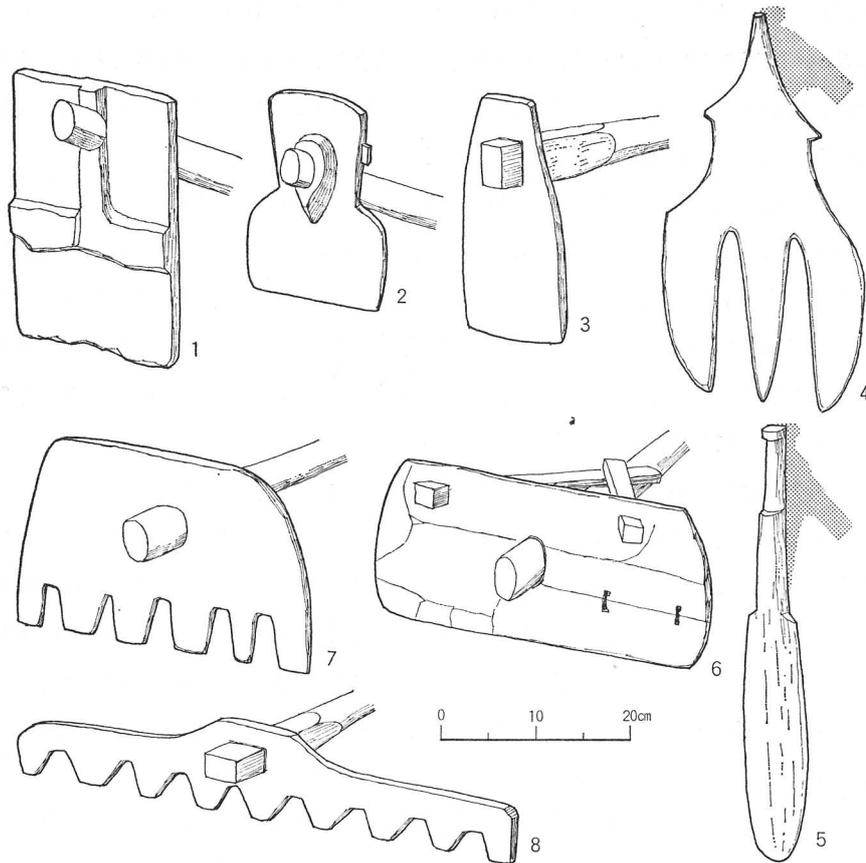


Fig. 61 鍬・エブリ模式図

また、身のヒビ破れを補修孔によって修理するのもこの具の特色である。単に土をかきならすだけでなく、ジョレンのように身部後面に土をのせて移動するような機能をもそなえるのだろう。同形で直刃のものが四分遺跡から発見されており、弥生時代後期に成立した耕具であることがわかるとともに、祖形を中期以前の丸鍬に求めることができる。

一般にいうエブリは細長い板の長辺に鋸歯形の歯を切りこんだものだが、古墳時代の例はいまのところ畿内地方で発見されていない。だが、古墳時代中期の佐賀県森の下遺跡からは、細板に鋸歯をつけたエブリが発見されており、畿内地方でも弥生時代以来連続して使われている可能性がつよい (Fig. 61-8)。細板のエブリの存在を予想するならば、身の高さが高いエブリは荒代や中代など土塊がまだよく砕けていない段階に用い、細板のエブリは苗代の整備や穀物を広げて乾かすときに用いるというような用途上の相違をかんがえねばならない。

エブリの用途

e 鉄器から推測される耕具

古墳などから発見される鉄製の刃先によって推測しうる耕具がある。

馬 鍬 いわゆる備中鍬の類で、身の全体を鉄でつくり、3~4本の歯をそなえた耕具である。弥生時代中期以前では、木の馬鍬が一般的だが、後期以降になると発見されない。これは弥生時代後期に木から鉄に移行していることを示しており、その間に馬鍬が消失したことを意味しない。

馬 鍬

鉄板折曲げ刃先 古墳から発見される鉄刃先に、長方形の鉄板を左右で折りかえたものが

1) 佐賀県教育委員会『生石・森の下遺跡』1978, p. 91。

## 第V章 考 察

ある。都出比呂志はそれらを、A（長さ10 cm をこえるもの）、B（長さ6～12 cm のもの）、C（長さ6 cm 以下のもの）にわけ、AとBを実用品としCを非実用の模型とした。その用途としては鍬先に想定し、打鍬の刃先に比定した<sup>1)</sup>。朝集殿の広鍬16に予想されるのはA類であり、出土量の比較的多いB類は狭鍬につくとみてよからう。

### 金属刃先の痕跡

福岡県板付遺跡2区から発見されている弥生時代中期の狭鍬には、銅ないしは鉄の刃先がつけられた痕跡をとどめる。その身幅は8.7 cm、刃部の幅は6.3 cm であり、同地方の遺跡から発見される銅刃先ないしは鉄刃先をつけたものとしてよい<sup>2)</sup>。だが、この種の刃先が必ずしも狭鍬にのみ限定されているとはかぎらない。弥生時代後期の岡山県上東遺跡からは、同種の鉄刃先が着柄鋤に装着された状態で発見されているからである。つまり、鉄板折曲げの刃先は、鍬・鋤ともに装着されているとみなければならない。

### U字形鉄刃先

U字形鉄刃先 古墳時代中期の終りごろから、U字形にかたどる鉄の刃先があらわれる。先縁のカーブの弱い弧刃のものとカーブの強い円刃のものがあるが、いずれも木身の台にはめて使用するものとされている。前者は弥生時代の銅製品に類似形のものがあり、後者は前者の使役によって磨耗したとする考え方がある。静岡県伊場遺跡で発見された6世紀の膝柄鍬Bに装着する刃先は弧刃であった<sup>3)</sup>。だが、上述のように鋤類にも鉄刃先をつけた痕跡をとどめるものがあり、鍬・鋤両用の刃先であることを想定しておかねばならない。後世の鉄刃先にしても、形態上では鍬鋤の区別を識別しえないものが少なくないからである。

### 手斧鍬

手斧鍬 かつて松本正信・加藤史郎は、古墳から発見される鉄斧のうち、「手斧とは考えられない比較的刃幅の狭い、顕著な肩をもたず細長い感じのする、薄手の蛤刃になっていない形式のものにも手斧と同じような柄、あるいはふたまたの板で作った柄をつけたらいったい何になるであろうか。これはまさしく、鍬としての機能を考える他にないしろものである。」とし、「しかし、刃幅は狭いが柄さえしっかりしたものをつければ、これでも開墾に使用しうることであきらかである。」といわれた。そして、現在も播州地方で用いられている“手斧鍬”という鍬が古墳時代にも存在したことを提唱した<sup>4)</sup>。

これは大蔵永常の『農具便利論』にいう<sup>ておのくわ</sup>鉞くわにあたるもので、大小3種に分類され、「第一麦を蒔、菜類等萬のものを蒔とき筋を切に用ゆ。……広き鉞くわを用ゆるは、田をすきかへし、日に乾かしたる塊を砕くには此具をもてきざみ、又はみねをもて打くだくに鉞をもてなすよりは、はるかほかどりて勞すくなし<sup>5)</sup>」と説明されているものと同一物であろう。かれらの論が正鵠を射ているとはいえないが、いわゆる鉄斧のなかには薄身で刃が袋の一方に片より袋の閉塞がじゅうぶんでなく、横斧の機能を果しそうにないものも確かに存在する。もしも開墾などに用いるのならば、大型鉄斧のほうがのぞましく、またサカキの膝柄のようなものではなく、カシ材のしっかりした柄のほうがのぞましい。いまのところ存在の可能性をみとめつつも、今後の検討をまつことにしたい。

1) 都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』51 1967, p. 37。

2) 福岡市教育委員会『板付 市営住宅建設にもなう発掘調査報告書』上巻, 1976, p.424。

3) 浜松市遺跡調査会前掲書『伊場遺跡第6・7

次発掘調査概報』p. 27・32。

4) 松本正信・加藤史郎「手斧鍬考」『考古学研究』57 1968, pp. 33-39。

5) 『復刻 日本科学古典 全書 6』朝日新聞社, 1978, p. 88。

古墳時代の木製耕具の遺物でみるかぎり、鉄刃を装着するものは少量であり、圧倒的多数は鉄刃を装着しない。これは木製品が低湿地からしか出土しないという特性によるのであろうが、しかし農耕具の鉄器化が無制限におこなわれなかったことを暗示している。

## B 古墳時代農耕具の問題点

畿内地方における古墳時代前・中期の耕具について概述した。それらのほか、杵・臼などの農具にも弥生時代中期以前とはことなる形態上の変化がみとめられ、弥生時代後期に普及する大足・鎌などの農具も大いに進展しているとみるべきである。農耕具でみるかぎり、弥生時代後期から古墳時代にかけての大きな転換点はみとめられず、弥生時代後期に確立した耕具の延長線上に位置づけられる。つまり、弥生時代中期から後期への転換期に農耕具に大きな画期があることを認めねばならない。このことは、愛媛県古照遺跡にみられるような大規模な灌漑土木工事を生み出す過程とも軌を一にしており、単なる農耕具の変化としてではなく農法転換の一つの証拠としてとらえることが可能である。

これまで、弥生時代後期以降の農耕具に対しては、きわめて工芸的に洗練された弥生時代中期以前の耕具と比較して、粗製化・退化・単純化などの評価がともすれば与えられがちであった。現象としては確かにそうである。この時期には美しい文様を刻した堅杵などはもうみとめられなくなり、整美で手のこんだ鋤鍬の類も少なくなる。すぐれて実用本位に製作されている気風が濃厚にたどよう。たとえば、柄孔を欠いた薄身の鍬やエブリの類は、出土品でみるかぎり軟弱で頼りないようにみえるが、軽くて使いやすい耕具を追求すれば、そのような形をとることは必至である。

このような耕具の転換の糸口になったのは、北部九州地方の農耕具が畿内地方に波及したことによるのではなかろうか。北部九州の農耕具の特色をなす鍬系耕具の大型で単純な形態が、弥生時代後期になって東漸したのではないかと考えるからである。農耕具ではないが、畿内地方における板状鉄斧から九州型の袋状鉄斧への転換も弥生時代後期にあるとみられている。しかし、それは北部九州から畿内地方へ一足飛びに移植されたのではなく、瀬戸内海の沿岸を東漸する過程で、在来の農耕具を改良する形で摂取されたようである。この間の状況は、さきに膝柄股鍬Bの形成過程の説明ですでに述べてきた。

北部九州における弥生時代前期の耕具と中期以降の耕具とを比較することは、前期の資料がきわめて少ない現状では非常に困難である。だが、瀬戸内・畿内・中部地方に形成された弥生時代中期までの農法が、前期の遠賀川式土器に象徴されるような九州を起点とする農法の発展形態であろうことは、仮定としてじゅうぶん成立する。だとすれば、畿内とは著しく形態を異にする弥生時代中期の北部九州の農耕具は、遠賀川式土器以降の時期に形成されたとみなさねばならない。

縄文時代と弥生時代とを画する水稻耕作だが、起源を中国の長江下流域に発し、朝鮮半島中・南部で定着したのち日本列島に及んだとする説は、大方の認めるところである。その農法は漢代まで中国の江南地方で行われていた火耕水耨であろうか。火耕水耨の解釈には諸説があり、大きな問題を内包しているのであるが、『漢書』武帝紀応劭注によると「まず雑草を焼いてその

大足・鎌

農耕具  
の画期実用本位の  
耕具九州から  
畿内へ水稻耕作  
の波及  
中国の農法

火耕水耨

第V章 考 察

漢代からの  
新稲作農法

あとへ水をそそいで稲を播種する。すると焼いたとき生残った雑草と稲とがともに発芽生長する。それが高さ7,8寸にのびたとき、ことごとくこれを刈ってふたたび灌水すると、雑草は枯死して、稲苗のみが生育する<sup>1)</sup>という農法であった。また、稲以外のアワ・ムギなどの栽培を併用したこともあろう。ところが、漢代以降、華東地方においては新しい稲作農法が発達する。それは『汜勝之書』崔寔にいう北土の移植式稲作であり、淮河流域の歳易(一年休閒)・直播(条播)・条間手耨の稲作法であった。田植と条播とは各段の違いであろうが、いずれにせよ立毛間の除草作業(耨)に重点がおかれ、そのことが稲の増産につながるとされている。6世紀の『齊民要術』にのべられている淮河流域の稲作法を、西山武一はつぎのようにまとめている。「1: 稲は必ず歳易(二年一作)がよい。上流に近いがよい。2: 陰曆(以下すべて陰曆記日)三月ないしは四月上中旬に直播し、霜降(九月中)期に刈る。3: まず放水十日ののち陸軸(ローラ)を曳くこと10回、地を熟せしめる。4: 種子を五日到水に漬し、次いで草籠で蒸らすこと3分、2分の長さに催芽さす。5: 一畝に三斗の割で擲種し、三日間鳥を逐う。6: 苗が7・8寸長のとき、陳草がまた起こるので、鎌で水を侵してこれを膿死せしめる。7: 苗がさらに長じてからまた耨する。8: 耨し終れば水を決し去って根を曝して堅くする。9: 水旱の状況に応じて時々灌漑する。10: 成熟直前には水を去る<sup>2)</sup>。」

齊民要術に  
みる稲作法

新式農法  
の導入

北部九州では弥生時代中期以降、瀬戸内以東では後期以降にみられる農耕具上の変化は、歳易条播か移植かの問題を別にすれば、中国における新式農法が何らかの形で朝鮮半島に定着しそれが日本に導入されたことを示すのではあるまいか。この時期に新たに登場する鎌・エブリ・フォーク状木器・大足などは新式農法を支える耕具であろう。たとえば、『周礼』地官稲人の鄭注に、「歩いて基の芟を揚ぐとは、田水が排瀉されている故に、田中には行って(草を)芟鉤で挙げる事ができる」というように、水で立枯れした水田の雑草を除去するためにフォークを使用することをのべている。また、近年になって各地で発見されている水田遺跡では、水の給排を巧みに操作する水田と水路の状況が明らかになっている。

耕具の使  
用段階

上のような観点から、弥生時代後期から古墳時代にかけての耕具の使用段階を想定すると次のようになる。最初の水田起耕は鋤類あるいは馬鋤で行い、さらに広鋤や狭鋤で土塊を碎き、放水後エブリで水田をならし、種子を条播さす。次に、通風・通光をよくし、稲の生育をうながすため、中耕除草を行って株間を整理する。この際、身が長くて股わかれした北部九州の股鋤あるいはナスビ形を呈する瀬戸内以東の膝柄股鋤Bが有効な役割りを果たしたと考える。この際、水面にただよう雑草類をフォークで集める。その後は適当に水の給排を管理し、秋になると鎌で刈り取るということになる。

いまのところ中国における木製農耕具が明らかになっていない現状で、転換の基準を漢式農法に求めるのは性急のきらいもあるが、さりとて弥生前中期の農法を基盤として日本列島で創造されたともおもえない。

漢式農法  
導入のき  
っかけ

漢式の新しい農法が朝鮮半島に土着し、それが日本へどのようにして導入されたか。いまのところ直接その間の事情を説明しうる資料を欠く。紀元前108年の楽浪郡設置によって漢植民

1) 西嶋定生「火耕水耨について」『中国経済史研究』東京大学出版会、1966。

『アジアの農法と農業社会』東京大学出版会1969, p.165。

2) 西山武一「齊民要術における淮域稲作の実体」

地経営の一環として朝鮮半島の農法が改良され、その余波が日本列島にもおよんだとする見方が、可能性の一つとしてありうる。かくして、弥生時代中期の北部九州の生産力を高めた新式農法が、弥生時代後期には瀬戸内海沿岸を東漸し、中部・関東地方にまでおよぶことになる。

新式農法が奈良盆地、大阪湾沿岸地方の農地拡大の原動力であり、大和・河内の生産量を飛躍的に進展せしめたのである。それは用水の給排水を調節する網目のような大小の水路を必要とする。低湿地で発見される木製耕具でみるかぎり、鋤類、それも有柄鋤が多数を占め、しかも著しい使用痕跡をとどめており、消耗率の高かったことを示す。纏向遺跡の石塚古墳周濠から発見されている一木鋤の多くには著しい使用痕跡をとどめるとともに、握り部のつくりが中空半円形に統一されている。このことは、特定工房で量産的に製造された鋤をもち、池溝を開発する集団労働の存在を暗示している。

大和・河内の生産量の増加

耕具の量産

古墳時代中期の終りごろに出現するU字形鉄刃先を重視して、農地開発の一つの画期とするみかたもあるが、それが農法自体を著しく改革したという痕跡はない。むしろ、弥生時代後期から古墳時代初期までに蓄積した革新的な技術を量的に拡大し、それを維持する生産の組織力を強化した一つの到達点としてとらえたほうがよいのではなからうか。

## C PEGによる出土木材の保存処理方法とその問題点

朝集殿下層から出土した各種の木製品を含む出土木材については、出土後に水浸けにして保存してきたが、木材の劣化がさらに進むなど、保存管理上に大きな問題が生じた。このために、科学的保存方法の一つである「PEG含浸法」による保存処理を行なった。処理の結果から見ると、樹種（広葉樹と針葉樹）や劣化状態などの違いによってその効果も変わることがわかった。このため、現段階におけるPEG含浸法の問題点を要約することにした。

i. 出土木材の保存方法のひとつに、高分子物質のPEG（ポリエチレン・グリコール）をしみこませて強化する方法がある。PEGはその分子量の大きさによって状態が異なっている。無色透明の液状を呈しているもの（分子量が小さい）から、軟こう状、そしてロウ状（分子量が大きい）のものまで種類は多い。そして、これらの異なる性質が出土木材の保存処理のために微妙に生かされている。

PEGの性質

一方、保存処理の対象となる出土木材は、長年、土中に埋もれていたものであり、劣化が激しく、その本来の物性は著しく損なわれている。しかも、出土木材の多くは、湿地帯からの出土品である。いわば、水漬けに近い状態で埋蔵されていたものであり、水分を過飽和に含んでいる。主な樹脂分であるセルロース分もほとんどが失われており、木材の強度もすでになくなっているものが多い。木材そのものの重さに対して、5倍から10倍の水を含むことによって辛うじて形をとどめている。自然乾燥させると、ほとんどのものは激しい収縮が起こり、もとの形がわからないくらいに変形してしまう。この含有水分を如何に処理するかが、出土木材保存の第一歩となる。

出土木材の状態

現在、①不安定ともいべき水を、安定した物質に置き変えてしまう方法、あるいは、②木

製品の原形を変えずに、含有水分を強制的に除去する方法がおこなわれている。前者の代表的な方法のひとつに「PEG 含浸法」が、後者には「真空凍結乾燥法」などがある。

**PEG  
含浸法**

ii. PEG 含浸法でも、その利用の仕方によって処理方法も違って来る。第一は、分子量の低い PEG（無色透明の液状を呈しており、吸湿性が大きく、木材を湿った状態に保つ）をしみこませて、木材の急激な乾燥を抑制することである。第二は、木材中に含まれている水分を分子量の大きい PEG（ロウ状を呈し、木材を硬化する）に置き換えて木材を処理する方法である。

朝集殿下層出土の木材について、当初、前者の処理方法（PEG-1500）を試みた<sup>1)</sup>。このような低分子量の PEG を使う方法は、スウェーデンのストックホルム港湾から出土した木造軍船のために応用された。それは、木材を湿らせ、乾燥速度を緩慢にし、木材の変形を最小限にとどめることに成功した例である（この場合には、乾燥後、さらに高分子量の PEG-3350 を表面にコーティングして完全を期している）。しかし、平城宮跡出土木材の場合には、十分な効果をあげることはできなかった。しみこませた PEG 水溶液は高温高湿の収蔵条件の中で、ふたたび外部に溶出してしまい、木材が変形する結果となったのである。これら低分子量 PEG による処理済の木材は、適切な条件のもとで保管され、徐々に乾燥されれば、変形を抑制できたであろう。

保存処理後の木材を保管するために、これほどの複雑な条件を要しないのが第二の方法といえる。すなわち、木材中の水分を分子量の大きい PEG-4000（ロウ状）に置き換えて強化することである。デンマークにおけるバイキング船体の保存方法がそれであった<sup>3)</sup>。平城宮跡出土の木材についても、すでに、この方法に切り換えている。

PEG を利用する保存方法では、その手法や効果の程度が上述の例のように種々異なってくるのは、木材保存の基本的な考え方の違いにもよるが、木材そのものの理学的性質にも起因している。木材は、出土した時点で、すでに劣化の激しいものと、そうでないものがある。さらに、その程度は樹種の違いに大きく影響される。また、同一の木材の中でも中心部分と表層部分では劣化度が異なっている。こうした諸条件を考慮したうえで、PEG 含浸法、真空凍結乾

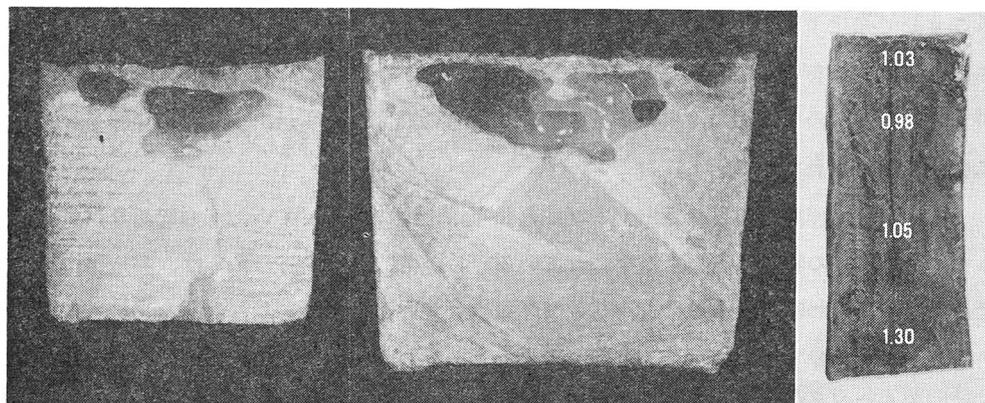


Fig. 62 PEG の凝固形態と PEG を含む木材の密度

- 1) 平均分子量が500~600で、外観は軟こう状を呈している。30%程度の水溶液をつくり、これに木製品を漬けて処理した。
- 2) およそ 360 年前、ストックホルム港湾に進水

- 直後沈没した木造軍艦「パーサ号」。1961年船体が引き揚げられ、保存処理された。
- 3) 五隻のバイキング船が発見された。これらは PEG 処理され、現在第五隻目を復原中。

燥法などの適否についても検討すべきである。

iii. PEG による保存処理が、PEG の性質や木材の理学的性質をふまえた適切な条件のもとで実施された場合でも、さらに複雑な技術的問題が残されている。木材の中にしみこむ過程としみこませたあとの PEG が凝固するまでの間に起こる木材への影響である。現在、当研究所がおこなっている「PEG 含浸法」は、分子量の大きい PEG-4000 を用い、最初20%ぐらいの水溶液に木材を浸して十分に浸透させる。水溶液の濃度は1～2年もの長い時間をかけて徐々に上昇させ、最終段階では95%から100%近い濃度の PEG をしみこませる。それは、常温ではロウ状を呈しており、木材を原形のまま保つことができる。

この方法によれば、PEG-4000 の溶液が木材の中にしみこんだあと、室温にまで冷却され凝固するのだが、その過程で PEG は収縮する。PEG の収縮が、具体的にどのような現象をひき起すのか、さらに、木材に与える影響などについて検討する必要がある。PEG-4000 の収縮率は、たとえば、融解した PEG 溶液を 80°C から 20°C にまで冷却し、凝固させると、体積比では約7%程度となる。この凝固は外周および下部から始まり、最終的に凝固する内心部で PEG の収縮が凝集される結果となり、空洞が発生する (Fig. 62・左)。このような PEG の収縮にとまらぬ空洞現象はあきらかに木材組織に影響を及ぼしているとみなければならない。また、木材の中で PEG 溶液が凝固するまでの間、通常室内温度のもとでは一昼夜を要するが、その間に溶液は木材の中で流動し、PEG の分布が一様ではなくなる。下部の方が PEG の分布密度は高くなる (Fig. 62・右)。同一木材の中で PEG の分布状態が異なる点も、恒久的な木材保存の観点からみれば、留意しなければならないところである。

Fig. 62・左は、500 および 1000 cc のビーカーの中で100%の PEG 溶液を 80°C で融解したあと、20°C にまで冷却、凝固させた場合のロウ状になった PEG 塊の断面をあらわしている。机上に放置されたビーカー内の PEG は、やや上方に空洞を生じている。この部分が最終的に凝固した箇所である。また、Fig. 62・右は、PEG-4000 を十分にしみこませた木材で、4箇所について密度 (PEG 分布の粗密に関係する) を測定したものである。写真左の場合と同じ部位、つまり、やや上方部分における密度が最も小さくなっている。このような PEG 自体の挙動が、木材の中でどのような影響を及ぼすのか、経年変化の観察を続行中である。しかし、過去10年間の結果をみる限り顕著な変化はあらわれていない。

現在、平城宮跡出土の木材については、PEG 含浸法とともに、真空凍結乾燥法を併用している。木材の大きさ、劣化の程度に応じて使い分けているが、これにも PEG を使っており、やはり分子量の選定、処理方法の決定など、複合的に絡む問題がすべて解決されているわけではない。たとえば、真空凍結乾燥法の場合には、PEG を有機溶剤 (t-ブチルアルコール) に溶かして木材にしみこませる。この PEG 溶液の適切な凝固点 (共晶点) の設定、つまり、予備凍結するときの温度の決定が重要となる。前述したように、PEG が凝固するときの現象が木材に影響を与えることがあるからだ。

しかし、いずれの処理方法を採用するにしても、PEG が利用されるので、その物性を理解し、活用すべきである。今後の出土木材保存の課題は、PEG 含浸法、真空凍結乾燥法の長所短所をより正確に把握することのほか、その短所を補う新しい方法を開発することである。

P E G  
の 収 縮

真 空 凍 結  
乾 燥 法

## 4 結 語

この報告は第二次朝堂院朝集殿地区および、第一次大極殿院西方の佐紀池下層で検出した古墳時代の溝とその出土遺物についてとりまとめたものである。平城宮からはこれまでの調査で、宮の造営に伴って削平された古墳や整土中から埴輪が数多く出土しており、古墳時代に関する資料もかなり得られている。しかし、木製農耕具や建築部材、多量の土器など生活遺物を豊富に出土する遺構は上記二例のほかはそう多くはない。

**遺 構** 東朝集殿基壇下を通る溝 SD6030は奈良山丘陵の一部が舌状に張り出した支丘の南端西縁に沿って北西から南東方向へ蛇行して流れる自然流路であり、上・下二層からなる堆積層からは多量の土器、埴輪、木製遺物が出土したが、なかでも南区とした溝の南半部からは建築部材や農耕具、容器などの木製品が多量に出土している。このように生活遺物を中心とするところから、近傍に集落の存在が推測されたが、住居跡などの建築遺構は調査区にはなく、溝の東方には円筒埴輪を棺に用いた墓（SX6035）が1基と埴輪片を含む土壙 SK6037、小溝 SD6038 などの確認にとどまった。

いっぽう、佐紀池の下層からみつかった古墳時代の溝 SD8520 はやはり奈良山丘陵から派生する二つの支丘間にある狭隘な谷地形が平野部に開口する位置にあり、谷水の自然排水溝とみられる。溝は分流、合流して蛇行しながら北から南へ流れるが、分流点と、南東方向からこの溝に注ぎ込む溝 SD8521 との合流点の二箇所に簡単な堰が設けられており、流水の調整をおこなっている。おそらく、下流域の水田耕作に関連する施設であったとみられる。

**土器の構成** 出土遺物のうち、土器に関しては SD6030 から土師器 928 点と須恵器 2 点が出土している。器種別では土師器に小型丸底壺、器台、椀、高杯、壺、甕、鉢、甗、蓋があり、須恵器は甗のみ上層から出土している。このうち、器種構成をみると、下層では甕がもっとも多く、以下小型丸底壺、壺、椀、器台、高杯の順となっており、上層では高杯がもっとも多く、次いで甕、壺、甗、小型丸底壺、椀となっている。これを用途別に対比してみると、下層は煮炊用土器（甕）が47%、供膳用土器（小型丸底壺、器台、椀、高杯）が39.8%、貯蔵用土器（壺）が12.9%となり、上層では供膳用土器が68%、煮炊用土器21.3%、貯蔵用土器5.9%であって、下層とやや様相を異にしている。なお、今回出土した壺のなかには、煤が付着し、煮炊に用いられた痕跡を示すものや、供膳用と考えられる小型壺（壺F）などがあるので、これらを加味すると、下層土器群では供膳に使用したもの40%、煮炊に使用したもの50%、貯蔵に使用したもの10%という比率になる。なお、SD8520 では92点の土師器が出土しているが、甕が80.4%を占め、壺は12%、小型丸底壺や高杯などの供膳に使用されたものは10%にみえない。

**土 器 群  
の 比 較** つぎに、下層と上層の土器群を比較すると、下層土器は上層土器にくらべて器種が多く、壺D、甕E、甕F、器台、椀A、小型丸底壺は下層に限られ、なかでも供膳精製土器である小型丸底壺はきわめて特徴的な器種である。また下層土器群には他地域で製作された土器が多く含まれており、一つの特徴をなしている。すなわち、瀬戸内海東部沿岸地域の土器（壺E・55）、山陰地方に見られる二重口縁を持つ土器（甕G・55～59）、河内地方の庄内式土器（甕F・85）、吉備地方の弥生時代後期の土器に類似する土器（甕H・79・80）、伊勢湾岸地方を中心にして

近畿地方から関東地方にまで広がる土器（甕Ⅰ・86～92）などである。以上の他地域産とみられる土器は下層出土土器の約8%を占めている。

このような下層土器群の特徴に対して上層土器群は供膳用精製土器がなくなり、かわって小型丸底壺C、高杯B・C、壺Ac、大型鉢などがまとまってあらわれ、また新しい様相として甕や須恵器の存在があげられる。また、下層に多くみられた甕A・Cが減少し、甕B・Dが増加する。さらに他地域産の土器はわずかに甕H（169）に限られるだけである。

このように上層と下層の土器群の間には明瞭な相違が認められるが、大和地方の同時期の他遺跡と比較すると、下層土器は坂田寺下層土器や纏向遺跡辻土壇4上層土器と共通し、上層土器は上の井手遺跡SE030上層に対比される。なお、SD8520出土土器についてはやはり、他地域産の土器（甕Ia・311～313、甕F・309・310）を含むが、器外面にタタキ調整をもつ甕J（328～330）の存在からすると、SD6030下層よりも一段階古い様相の土器群である。

SD6030出土の木製品としては木工具、農具、什器、建築部材、その他がある。木工具には縦斧柄と横斧柄があり、農具には鋏、鋸、フォーク状木器、エブリ、田下駄、槌、カケヤ、槌の子、叩き板、鎌柄がある。什器に属するものとしてはちきり、糸巻の枠、自在鉤、案、箱、蓋、槽、十能形木器があり、建築部材とするものは梯子、柱、杭、板、楔、棒などである。この他に火鑽臼、木製矢、堅筒、背負梯子、刀の鞘などの生活具と装身具がある。またSD8520からは鋤・鋏・槌の農具、梯子・柱・板・棒などの建築部材と箱、まな板が出土している。これらの木製品のうち、斧柄と鋤、鋏に関する若干の考察をおこない、また古墳時代前期、中期における耕具の構成についてふれているが、その要点を述べると、まず斧柄については刃を装着する台部の形状から鉄製刃が平行につく縦斧と、直角につく横斧の二種が想定される。そこで、古墳出土の鉄斧についてみると、縦斧には3種、横斧には4種あることが明らかになった（Fig. 54・55）。また、有肩鉄斧には片刃と両刃があって片刃鉄斧は横斧に、両刃鉄斧は縦斧として用いられたことを指摘した。

各種の耕具のなかでも鋏は弥生時代以来、多様な形式を持ち、広く使用された水田耕具であるが、なかでも二股の身をもつ「ナスビ形鋏」は、柄を身に対して平行につける鋤の機能をもった耕具とも考えられていたが、現在では身に対して鋭角の柄を固定した実例がみいだされたことから鋏であることが明らかになっている。柄が膝を屈めたかたちをするので「膝柄股鋏」と称するが、身の頭部が未発達なA類は弥生時代に限られ、笠形の頭部を持つB類は弥生時代後期にあらわれ、古墳時代の前・中期まで存続する。しかし、古墳時代後期に鉄製刃先を装着した膝柄股鋏B（Fig. 57-10）が出現し、膝柄股鋏Bや膝柄鋏Aは衰退する。また、今回出土した木製耕具を中心にして畿内地方における古墳時代前・中期の水田耕具構成についてみると、鋤（一木鋤、組合わせ鋤）、フォーク状木器、鋏（広鋏、狭鋏、膝柄鋏、膝柄股鋏）、エブリ、馬鋤などがあり、これに鉄板折曲げ刃先、U字形鉄刃先、手斧鋏などの鉄製刃先から推測される耕具が加わる。しかし、膝柄股鋏にみるように、一木鋤Bと手斧鋏をのぞくと他はいずれも弥生時代後期に確立した耕具の延長上に古墳時代前・中期の耕具があったと考えられるのである。むしろ、耕具の転換期は弥生時代中期以前の工芸的に洗練された耕具と弥生時代後期の単純化された実用本位の耕具との間に置くことができる。この変化は中国における移植式稲作農法が朝鮮半島を経て北部九州に導入され、さらに畿内地方に及ぶ過程でもたらされたものと考

木製品の  
種類

鋏の変遷

古墳時代の  
耕具

## 第V章 考 察

えた。

### 古墳時代 遺構の分布

最後に平城宮域における古墳時代の遺構のあり方についてふれておくと、古墳時代の遺構とくに4～5世紀に造営された大型古墳は旧丘陵の頂部に見い出され、支丘の縁辺と微高地には小型の方墳，掘立柱建物，農耕具などの遺物を出土する溝が集中する傾向がみられる。ところが6～7世紀にかけての遺構は丘陵部にはみられなくなり，かわって宮の南側の沖積平野からは木製農耕具を伴う遺跡が発見されている。このことは古墳時代の生活，生産の基盤が丘陵地から次第に平野部へ進出していった過程を示すようである。